

令和 6 年度指定（学際領域学科）「文理探究科」（令和 7 年度設置）

新時代に対応した高等学校改革推進事業（普通科改革支援事業）
令和 7 年度研究開発実施報告書 第 2 年次



兵庫県立淡路三原高等学校

巻頭言

兵庫県立淡路三原高等学校

校長 大塚 剛啓

本校では令和3年度から試行錯誤を繰り返しながら、探究活動の取組を進めてきましたが、令和5年度からは総合的な探究の時間を「Sagas」と名付け、取組を強化してきました。また、令和6年度から文部科学省の「新時代に対応した高等学校改革推進事業（普通科改革支援事業）」を受託し、大学や様々な機関と連携しながら取組を深化させています。

令和7年度から新たに設置された文理探究科では、新しい探究科目として、統計データの分析手法を学ぶ「データサイエンス基礎」の授業が始まり、大学の先生の指導をいただきながらこれまでにない内容の授業に取り組んでいます。また、来年度からは、英文を含む文献読解やディスカッションを行う「読解 Integral」を開設する予定で、それに向けて準備を整えているところです。

文理探究科では、文理融合の学びを通じて、主体性、創造性、協調性、社会参画意識を醸成し、柔軟な発想で未来の新たな価値やシステムを創造する人材の育成を目指すこととしています。

生徒たちは、探究活動を通して、社会に関心をもち、地域や関係機関の人たちとつながり、主体的に考え、学びを深めながら、積極的に行動する力を伸ばしてくれていると思います。そして、この探究の取組が淡路三原高校の教育活動の大きな特徴になりつつあると思っています。

この報告書では今年度行った「普通科改革支援事業」の取組や学校全体の探究活動の推進状況についてまとめています。文部科学省の本事業は残念ながら、最終年度を残し今年度末をもって終了することになりましたが、県教育委員会の支援のもと、今後も普通科改革の取組を継続して参ります。

最後になりますが、本事業実施にあたり、ご支援をいただきました県教育委員会高校教育課、教育機関、企業・団体、地域の皆様に改めて感謝を申し上げ、巻頭言といたします。

巻頭言

目次

第1章：事業の概要とねらい

- 1.1 本校の現状と課題 1
- 1.2 文理探究科の目指す生徒像とカリキュラム開発の関係 3
- 1.3 カリキュラム開発のグランドデザイン 4

第2章：実施体制と組織マネジメント

- 2.1 事業推進体制 5
- 2.2 事業推進体制の内容 7

第3章：カリキュラム実践と高大産官連携

- 3.1 令和7年度文理探究科のカリキュラム実施内容 13
- 3.2 来年度以降実施開始のカリキュラム計画内容 22
- 3.3 探究活動に関わる連携機関 28
- 3.4 その他探究活動に関わる実践活動 30
- 3.5 学習環境の整備 33
- 3.6 まとめ 33

第4章：探究活動における学習効果の分析

- 4.1 評価の視点と手法 34
- 4.2 ルーブリック評価の結果と分析 35
- 4.3 分析と考察 36

第5章：成果の普及と広報

- 5.1 発表会などの実施 38
- 5.2 先進校の視察 43
- 5.3 オープンハイスクールの実施 44
- 5.4 その他広報活動の方法 46

関係資料

- 1. 令和7年度入学生教育課程表 49
- 2. 文理探究科1年アンケート結果 50
- 3. Sagas ツアー成果ポスター 52
- 4. 成果概要図 55

第1章：事業の概要とねらい

1.1 本校の現状と課題

1) 文理探究科について

設置区分	課程別	学科の種類	設置年度	収容定員
公立	全日制	学際領域学科	令和7年度	1学年40人

2) 文理探究科設置以前

本校は、平成19年に三原高校と志知高校が発展的に統合して開校し、約20年間に渡って普通科高校として発展し続け、地域の信頼を獲得してきた。開校以来前身の一つである三原高校の科学コースの流れを継承し、自然科学系のサイエンスコースを設置し、インスパイアハイスクール事業を活用して、神戸大学でのワークショップや理化学研究所訪問、また、グローバルマインド涵養のために高校生模倣国連大会への参加など国際性も高めてきた。サイエンスコースでは、テクノロジーの進歩やグローバル化の進展といった時代の急激な変化に対応するべく、大学等と連携しながら、課題研究を通して自然科学について探究する力や態度を養うとともに、プレゼンテーション力、英語コミュニケーション力を充実させコースの特色化を図ってきた。また、令和4年度より、南あわじ市と連携協定を結び、地域課題に取り組む探究活動（課題の発見、解決策の創案、市への提案）も行ってきた。その結果として、自然科学のみならず、社会科学、人文科学への関心が高まり、進路結果を見てもその多様性は文理の枠を超えて取り組んできた成果の集大成といえる。

このように、本校は普通科教育の特色化において、一定の成果を収めてきたが、生徒たちは真面目に学習に取り組むものの、総じて受動的で、主体的、創造的に物事に取り組む姿勢が欠けている場面が見られた。また、大学進学は希望するが、自分がやりたいことが明確ではない生徒も少なくなかった。授業においても、思考力、表現力の育成に課題があり、探究的な学びの要素はあるものの、それぞれの専門的な枠の中での取組となり、学びが学際的に広がっているとは言えない状況であった。

3) 文理探究科設置の経緯と目的

兵庫県は、県立高等学校教育改革第三次実施計画において、「変化が激しく予測困難な時代を迎える中で、社会の変化に柔軟に対応し、自らの力で新しい社会を切り拓く力」の育成を掲げ、普通科教育の改革を推進している。

この計画に従い、文理探究科の前身であるサイエンスコースでの教育実践を下敷きに、カリキュラム計画においても、自然科学、社会科学、人文科学の学びの融合を図り、急速に変化する世界に対応する知識やスキルを習得することができる学びを展開する必要があった。

近年、淡路島は、地理的特性から少子高齢化が急速に進んでおり、地方が抱える課題が山積している。そこで、身近に存在する多様な課題を分析の対象とし、その課題解決に向けた取組を考察することが、探究活動の重要リソースであり、生徒の学びの場となってきた。

この学びを進化させるためにも、分野を問わず、企業や大学の協力のもと、主体的に発見した課題の解決策を実践検証することにより、創造性を育み、イノベーションを促進することのできる学際的教育環境を整える必要があった。キャリア教育の観点からも、時代に応じた知識、技能、思考力、創造力が身につくカリキュラム開発を行うことで、普通科改革の先駆けとなり、学校創立 20 周年に向けた新たな学校の魅力・特色づくりを図りたいと考えた。

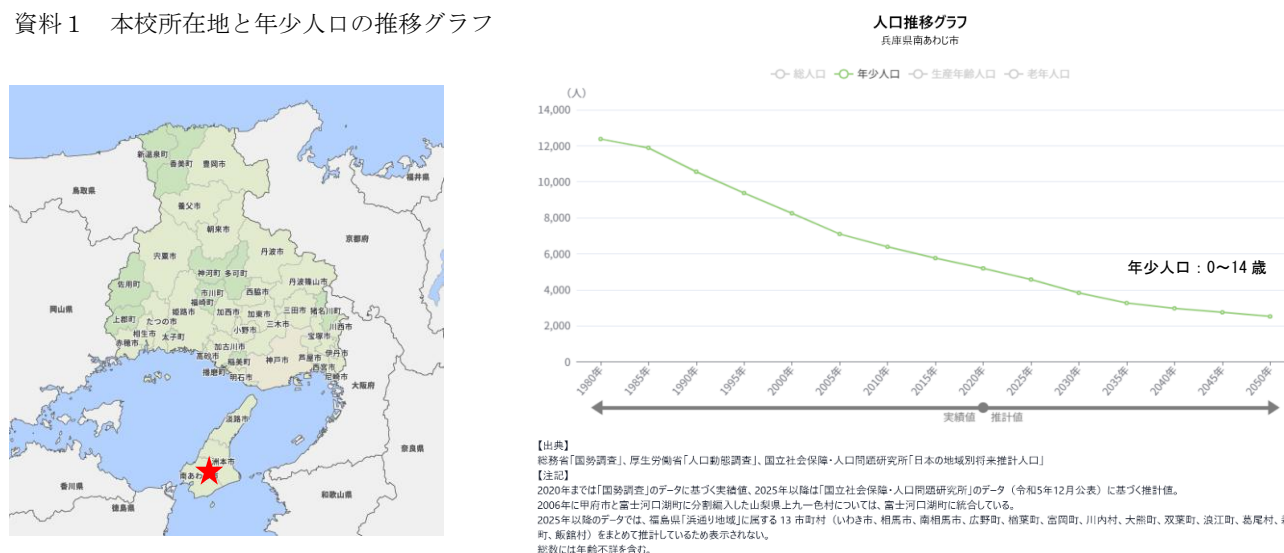
4) 文理探究科 1 期生の課題

令和 7 年度、文理探究科 1 期生が入学した。少子高齢化による生徒数減少と学びの多様化などの影響を受け、淡路島内の生徒募集状況は、県立 5 校のほとんどで定員割れを余儀なくされている。本校においても、サイエンスコースの募集状況は、3 年前から定員を満たしていない。高校入学のハードルが下がるなか、中学教員やその生徒、保護者において、新学際学科への理解を得るのは容易ではなく、文理探究科 1 期生の入学人数は定員 40 名に対し 25 名であった。

このような状況のなか入学した 1 期生は、基礎的学習能力に差があるものの、総じて学習意欲やコミュニケーション能力が高く、総合的な探究の時間（Sagas ラボ）や教科「探究」（データサイエンス基礎）においても、主体的に学ぶ姿勢が見られる。学校行事でも、助け合い、より完成度の高いものを創り上げようとする意欲に満ちている。

課題としては、オープンハイスクール以外にも公開授業や各種媒体を使用した情報提供など草の根的な広報活動が続け、南あわじ市唯一の高校として、再度、主体的に選ばれる学校を目指すことがあげられる。カリキュラム開発においては、授業間連携と本事業で得られた企業団体、大学との連携関係を絶やさず、ICT を積極的に活用して、兵庫県最南端という地理的条件を克服できるような授業実践が必要と考えている。

資料 1 本校所在地と年少人口の推移グラフ



資料 2：淡路三原高校サイエンスコース、文理探究科の入学人数推移（定員 40 名）

2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022	2023	2024	2025
40	40	40	40	40	40	40	31	25	25

* 2025 年から文理探究科

1.2 文理探究科の目指す生徒像とカリキュラム開発の関係

1) 文理探究科（その他普通科）目的・目標

学際教育により自然科学、社会科学、人文科学の各分野で生徒の興味関心に基づいて学び、急速に変化する世界に対応する知識やスキルを習得する。さらに企業や大学、海外の学校等と協働して発見した課題の解決策を見つけ、実践検証することにより、主体性、創造性、協調性、社会参画意識を持った人材を育成する。

2) 育成する資質・能力

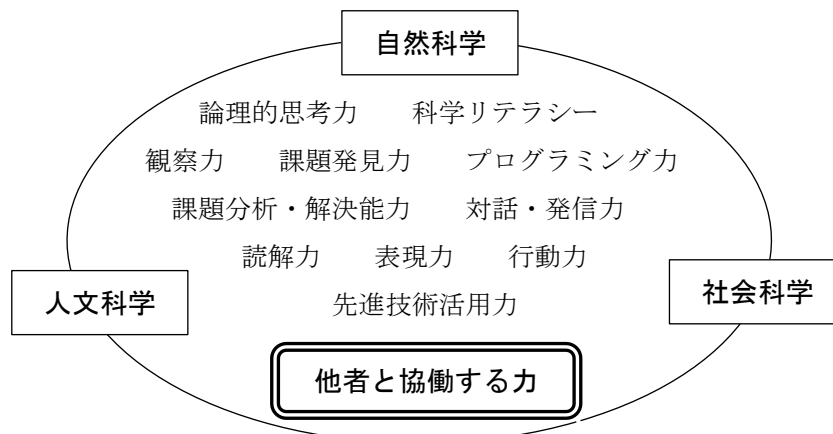
a. 全体

主体性	基礎学力を積み上げ、現存する社会課題や未来社会で想定される問題を自分ごとと認識し、解決に積極的に関わっていこうとする
創造性	課題を楽観的に捉え、柔軟な発想で解決方法や価値を創造する
協調性	他者と支え合い、自分の役割を認識し、粘り強く取り組む
社会参画意識	<ul style="list-style-type: none"> ・自分が社会に貢献できる存在であることを認識する ・時代の先端を走る大人の生き方に触れ、将来、よりよい社会の実現にどう関わっていくかを考える

b. 学際領域各要素

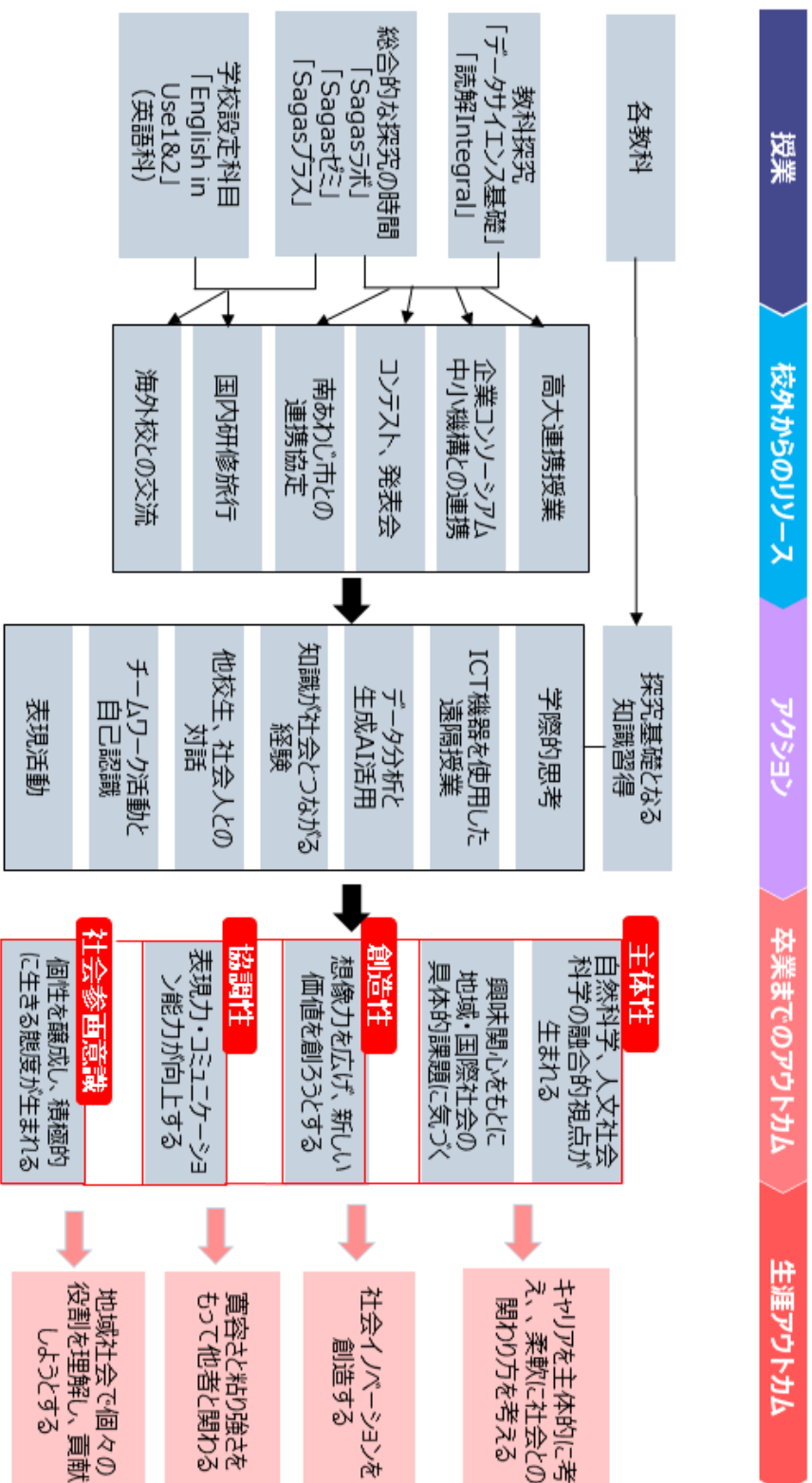
自然科学	論理的思考力 科学リテラシー 観察力 課題発見力 プログラミング力	他者と協働する力
社会科学	課題分析・解決能力 対話・発信力 先進技術活用力 行動力	
人文科学	読解力 表現力	

※各要素は複合的に絡んでおり、各分野に限定されるものではない。



「総合的な探究の時間（Sagas）」と教科「探究」を含む各教科・科目を有機的に結び付け、知の連携による学際的な学びを実現し、上記の力を育成する。

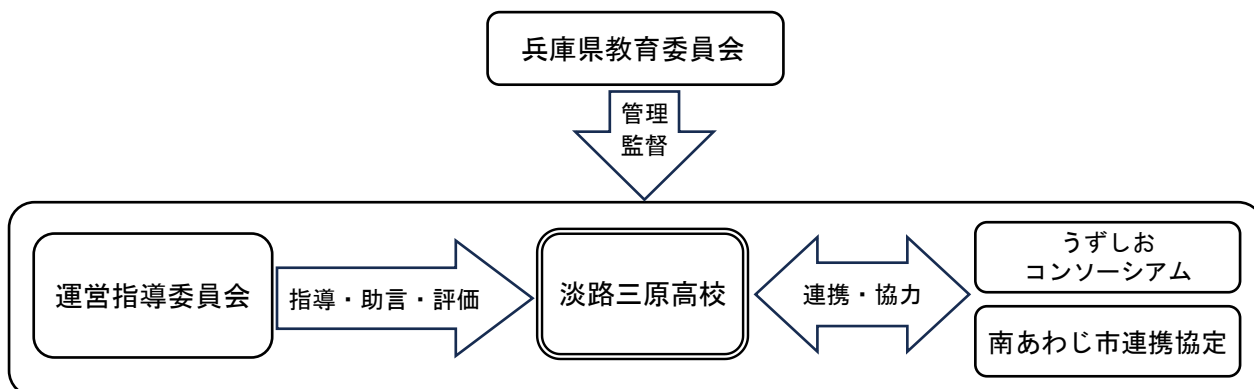
カリキュラム開発のグランドデザイン



1.3 カリキュラム開発のグランドデザイン

第2章：実施体制と組織マネジメント

2.1 事業推進体制



1) キャリア創造部の設置

キャリア創造部を中心に、すべての学年、部が協議し、常に探究活動の改善と広報に努める。キャリア創造部が担う主な内容は以下の通りである。

- a. コーディネーターとの連携とカリキュラム開発、運営、評価、改善
- b. 企業、大学とのコンソーシアムを拡大、連携し、社会とつながる授業を計画、実施
- c. 各学年と協議し、探究活動実施計画作成、実施支援
- d. 運営指導委員会の開催と指導助言による授業改善
- e. 文理探究科のカリキュラム運営と校内研修計画、実施
- f. 高大産官連携の維持と新規協力機関の開拓
- g. 探究活動における ICT やデジタル機材の活用場面の創造と機材管理
- h. 職員会議等における事業内容やデータ共有
- i. 探究活動用特別教室「探究ラボ」の活用計画と管理
- j. 教務部と新しいカリキュラム運営のための時間割調整
- k. 小中学校教員、生徒、保護者、地域への継続的広報活動

2) 新学科推進委員会の設置

「サイエンスコース委員会」を母体として、「文理探究科」設置に向け立ち上げた「コース改編委員会」を「新学科推進委員会」に改称

■新学科推進委員会構成員：

校長、教頭、キャリア創造部長、教務部長、進路指導部長、コーディネーター

部	役割
教務部	<ul style="list-style-type: none"> ・本事業に関する教育課程の編成、実施 ・カリキュラム委員会との連携
進路指導部	<ul style="list-style-type: none"> ・本事業におけるキャリア教育と進路指導の一体化

表の内容について、継続的に協議、改善のサイクルを繰り返す。また、各教科が教科「探究」と有機的に連携し、生徒が学びの連続性を実感できるような授業づくりを行えるように、カリキュラム委員会と協働して、より良いカリキュラムづくりを行う。

3) 運営指導委員会の設置

- ・専門的な知見を有する大学関係者や企業関係者、自治体関係者などの委員で構成する運営指導委員会を年間2回開催した。校内の教育活動における進行管理、評価について助言をいただいた。
- ・委員会の構成員である県教育委員会事務局から、県全体の施策等を踏まえた指導助言を受けた。

4) コンソーシアム委員会の設置

- ・通年でコンソーシアム委員が特別講師として授業に関わる機会をつくり、学校への関わりを創出
- ・コンソーシアム委員会を開催し、カリキュラム等について、各専門分野の立場から必要な助言を与え、協働体制を構築

※1)～4)を関連付けることにより期待される相乗効果

- ・探究活動は、専門的かつ広範囲な内容を伴うことから、従来の教育環境では効果的な実施が困難な面がある。多方面の専門家や組織と、教育目標や実施内容等を共有することにより、提案、人的支援及び物的支援等を受けやすくなる。
- ・生徒主体の探究活動を、校内外で展開することで、生徒・教員が地域の様々な人と出会い、新たな視点や問題意識が芽生える。また、カリキュラムから得た知識や技能を各自の興味関心と連動させることで、思考力や表現力を伴う深い学びに進化させることができる。最終的には、探究活動を通して自己研鑽を行い、俯瞰的な視野が得られるようになり、将来へつながるキャリア形成が可能となる。
- ・生徒が教育活動全体を通して、「社会全体から応援されている」という実感を得ることができる。

2.2 事業推進体制の内容

1) 運営指導委員会

a. 運営指導委員会の構成員

所属	氏名	所属・役職・主な実績
神戸市立外国語大学	中嶋 圭介	国際関係学科准教授 神戸グローバル教育センター長
四国大学	松重 和美	四国大学学長 京都大学名誉教授
株式会社海空	大継 康高	イベント企画・運営会社社長 令和5年度「ふるさとイベント大賞」受賞
青山学院大学	大本 晋也	コミュニティ人間科学部特任教授 元国立淡路青少年交流の家所長
兵庫県教育委員会事務局 高校教育課	倉橋 良太	設置者代表 高校教育課長

b. 運営指導委員会の取組

- ・事業の進捗に対する指導助言
- ・事業の改善・充実に向けた情報提供
- ・事業の成果検証、評価についての学校の自己評価の妥当性について評価
- ・成果発表会における生徒の学びの評価

c. 運営指導委員会での協議事項、意見など

■第1回運営指導委員会

日 時：令和7年7月25日（金）14:00～15:30

場 所：兵庫県立淡路三原高等学校 応接室

出席者：【運営指導委員】中嶋圭介、松重和美、大本晋也、大継康高

【高校教育課】樋口秀一指導主事

【本校職員】大塚剛啓校長、黒田陽子主幹教諭、岩木拓也教諭、山口聖子実習助手

【コーディネーター】武中聖子

〈主な意見と助言〉

- 探究活動の成果を大学入試や外部評価とどのように結び付けていくかについては、整理していく必要がある。成果の示し方や評価の在り方については、引き続き検討すべき課題である。

- 探究活動を進める上では、授業時間の制約や教員の負担といった現場の課題がある。放課後の時間の使い方や探究ラボの活用など、さらに柔軟な学習環境の整備が必要である。生徒主体の活動を支える仕組みづくりについて今後も継続して取り組む必要がある。
- 文理探究科の現状について、定員 40 名に対して入学者が 25 名となっている。学科の特色や学びの内容を中学生や保護者にどのように伝えていくかが重要であり、広報の工夫が必要である。
- 探究ラボやデジタル機器の活用については、設備を整えるだけでなく、それがどのような学びにつながるのかを具体的に示していくことが大切ではないか。地域や企業、大学などとの連携を通して、実践的な学びを充実させてほしい。
- カリキュラムの内容については、理系寄りになりすぎないように注意しながら、人文・社会的な視点も取り入れた文理融合の学びを意識することが大切ではないか。文系と理系の教員がそれぞれの強みを生かしながら連携していくことが大切だ。
- 探究活動の企画や運営には教員の負担が大きくなりがちのため、校内での役割分担や運営の仕組みを整えていく必要があるのではないかと。
- 合同発表会や外部コンテストなどを実施する際には、学校間や関係機関との役割分担を整理しておくことが大切であり、その上で継続的な連携体制を築いていくことが望ましい。

■第2回運営指導委員会

日時：令和8年3月5日（木）13:00～14:00

場所：洲本市文化体育館会議室

出席者：【運営指導委員】中嶋圭介、大継康高、

【高校教育課】樋口秀一指導主事

【本校職員】大塚剛啓校長、坂井啓太郎教頭、黒田陽子主幹教諭、岩木拓也教諭、山口聖子
実習助手

【コーディネーター】武中聖子

〈主な意見と助言〉

- 学校設定科目「データサイエンス基礎」について、統計的な内容を学ぶ際には、探究活動との結び付きを十分に行うことが大切である。統計的な手法を机上で学ぶよりも実習を通してデータを取り、扱うような設計が好ましい。
- 地域連携については、市役所や大学、地域機関等との取組が進められている点を踏まえつつ、行政だけに依存するのではなく、大学や企業なども含めた幅広い関係者をつなぐ形で連携を広げていくことが望ましい。行政は仲介役として機能し、緩やかなネットワークの中で多様な学びの機会を生徒に提供していくことが重要ではないか。
- 文理探究科の取組については、外部への発信の在り方が今後の生徒募集にも影響する可能性がある。中学生や保護者に向けて、どのような学びが行われているのか、どのような力が身に付く

のかを分かりやすく伝える工夫が必要だ。また、探究活動で成果を上げた生徒の事例や卒業生の経験談を活用することで、学びの魅力をより具体的に伝えられるのではないかと。中学生、教員、保護者に向けて発信するのなら、そこに響くような広報にしないとイケない。

○ウェブサイト「文理探究科 note」について、誰に向けての発信なのか、ターゲットを意識して作成することが必要だ。noteの目的は何なのか、生徒のトレーニングだけで終わるのか。そうであるとしても、他校と連携して、「いいね」を励みにするのもいい。そのような工夫が大切だ。中学生が探究ラボを使えたり、卒業生が中学校で授業をしたりするなど、そういったことがよい広報となる。

○全国レベルのコンテストで入賞したような場合には宣伝材料になるので、そのような生徒に広報活動に協力してもらうなどして、市の広報や学校ビデオへの出演など考えてはどうか。

○広報は差別化が大事。この学校で学べるものをアピール。大学でも保護者向けと学生向けに分けてyoutubeビデオ作製など行っている。ターゲットを意識して企画してほしい。

○AIを活用して、調べ方もどんどん進化している。学校現場が取り残されないように、教員も学びながら授業を行わないと、生徒の方が先を進んでいるというようなこともあり得る。

d. 今年度の成果と課題及び次年度への反映方針

第1回目の運営委員会では、遠隔地からも本校にお越しいただき、授業内容から広報方法まで非常に活発なご意見をいただいた。ループリックやアンケートの内容に関しても、適宜、相談しながら進めることができ、本事業計画の改善に役立っている。特に地域リソースの活用に関しては、文理探究科の新カリキュラムといかに融合させ、相乗効果を生み出していくかを今後の優先課題とした。

第2回目に関しては、校外での発表会との同時日程で調整不足があり、2名の委員が欠席となったが、参加された委員から今後に向けて具体的な改善点を提案していただいた。特に、広報活動に対するご助言では、「ターゲット」というキーワードが頻出し、発信するだけに留まらず、受信する相手が求める内容であるか再検討することとなった。「広く浅く誰にでも」より「ピンポイントで満足度が高い」内容にすることを喫緊の課題としたい。また、カリキュラムでは、授業で得られた知識技能を具体的に表現できる場が「総合的な学習の時間」であることを教員が強く意識し、情報共有を心がけ授業力を高め合うようなチーム感の醸成に努めたい。

本事業は今年度で終了するが、支援事業で得られたご縁を大切に、今後ともご助言をいただけるような校内体制を築いていきたい。

2) コンソーシアム委員会

a. コンソーシアム委員会の構成員

所属	氏名	所属・役職・主な実績
吉備国際大学	相野 公孝	農学部 地域創成農学科 学部長 教授 本校に一番近い地域密着型の大学、継続して施設の利用、講師派遣などの支援
兵庫県立大学	嶽山 洋志	大学院緑環境景観マネジメント研究科准教授 継続して探究授業に多様な形態で支援
関西看護医療大学	西村 由実子	看護学部看護学科 准教授 国際保健に関する特別授業を継続実施
鳴門教育大学院	藤原 大樹	学校教育研究科 准教授 データサイエンス基礎の授業支援
アイ・エス・ネクスト(株)	酒井 貴弘	代表取締役 淡路三原高校 3 回生 農業関連企業を全国展開
株式会社あべいすと	安部 則行	代表取締役 三原高校 46 回生 地域でリハビリテーション施設経営
(株)日東コンピュータサービス	石田 一成	代表取締役 IT 分野でシステム開発、支援、コンサルティング業務など展開
南あわじ市	柏木 映理子	本校支援事業コーディネーター 南あわじ市教育委員会 スポーツ青少年課課長

b. コンソーシアム委員会の取組

- ・特別講師として授業の実施
- ・校外での探究活動のコーディネート
- ・島内普通科高校合同探究活動発表会「トリコロ★クエスト（3月5日開催）」での指導助言

c. トリコロ★クエストでの指導助言

日 時：令和8年3月5日（木）17:00～17:40 ＊トリコロ★クエスト開催後実施

場 所：洲本市文化体育館会議室

出席者：【コンソーシアム委員】嶽山洋志、西村由実子、安部則行、石田一成、松原茂仁

【運営指導委員】中嶋圭介、大継康高

【高校教育課】樋口秀一指導主事

【他校職員】洲本高校 堀真也、津名高校 中村貴胤

【本校職員】大塚剛啓校長、坂井啓太郎教頭、黒田陽子、岩木拓也

〈主な意見と助言〉

- 生徒の探究内容について、着眼点の面白さや独自のデータ収集、実験・アンケートなどの取組は評価できる。全体としてこれまでより発表の質は向上しており、大学の研究にもつながる可能性を感じさせるテーマも見られた。一方で、生徒によって研究の深さには差があり、特に問題設定の段階での理解の深さに課題が見られる。
- 探究テーマの設定については、課題の理解が表面的になりがちであり、背景にある原因や要因を構造的に捉える視点が十分ではない。また、既存の研究や社会で行われている取組についての調査が不足しているケースも見られ、先行研究や既存施策を調べたうえで、何が既に分かっているか、何がまだ解決されていないのかを整理することが重要である。仮説やリサーチクエスチョンを明確にした上で研究を進めることで、探究の方向性がよりはっきりするのではないかと。
- 発表内容については、テーマから結論までがあらかじめ決まっているように見える発表もあり、研究の過程で得られた気づきや試行錯誤のプロセスをもっと示すことが大切ではないかと。探究活動では必ずしも最初に考えた答えにとどり着く必要はなく、調査や実験の結果によって結論が変わることも含めて研究の過程であるため、その過程を丁寧に伝えることが望ましい。
- 発表の仕方については、声が小さく聞き取りにくい場面があり、書き言葉の文章をそのまま読むような発表になっているケースも見られた。発表では自分の言葉で話し、聞き手に伝えることを意識することが重要であり、もう少し声量を上げて堂々と話すことが望ましい。また、聞き手側の質問が少ない点も課題として挙げられ、発表後の質疑を通して研究内容を深めていく姿勢を育てる必要があるのではないかと。
- 発表会の運営については、会場がやや狭く、複数の発表が同時に行われることで周囲の声が重なり、発表者の声が聞き取りにくい場面があった。分科会を教室ごとに分けるなど、より落ち着いて対話ができる環境を整えることが望ましいのではないかと。また、コメント用紙の記入項目が多いことで、聞くことや議論に集中しにくくなる可能性もあるため、記入内容を簡潔にするなど運営面の工夫も検討できるのではないかと。

d. 今年度の成果と課題及び次年度への反映方針

今年度のコンソーシアムでは、卒業生や地域で活躍する人材からの協力をいただき、探究活動と地域との親和性をさらに高めようと試みた。「総合的な探究の時間」の特別講義や発表会での評価や指導なども行っていただき、生徒・教員ともに様々な観点で助言をいただいた。本校卒業生や地域のことをよく知る方々から学ぶことは多く、参加した生徒も地域から応援されていることを実感できた。

課題は、委員の専門分野と生徒個別の探究活動をマッチングさせるような校内の仕組みづくりである。探究活動が机上の調べ学習に終わらないように、まずはコンソーシアム体制の校内理解を高めることが必要だと考えている。指導教員が気軽に委員に相談できるようにし、探究の難所を生徒

と共に突破する経験を積み重ねたい。学校における「探究は面倒だ」「指導の仕方がわからない」といった教員丸抱えの負担感を軽減し、生徒と共に学ぶ探究活動づくりを目指したい。

3) コーディネーター

a. コーディネーターの配置及び活動内容

本校コーディネーター 武中 聖子（本校前校長）年間 160 時間

b. 活動内容

- ・カリキュラム及び教育方法の計画、実施、改善
- ・広報活動への助言
- ・連携機関の新規開拓および連絡調整
- ・「総合的な探究の時間」や学校設定科目の学習計画と助言

c. 今年度の成果と課題

本年度コーディネーターは前校長で本事業の採択に関わった人物であったため、学校の特色をよく理解した上で、コーディネート業務に携わっていただいた。地域や教育活動を熟知し、大学、企業との連携に関してもよく知る人材として、オープンハイスクールや地域発表会など、探究活動と広報の両面で教員と協力することができた。

2年間コーディネーターを配置したが、教員以外の地域人材で、既定の時間数勤務できる候補者を探すことが課題であった。職員室に探究活動や広報を支える支援員がいることで、職員に教育の方向性を共有する機会も増えたが、一方で、事業が終了する来年度からはその業務を教員で担うことになる。この点では、引き続きキャリア創造部が中心となって、運営指導委員やコンソーシアム委員とのつながりを保ち、教員が外部に積極的に相談していくことで開かれた学校づくりを目指したい。そのためにも、支援事業開始から新学科設置にあたって経緯、目標、また実施計画を全職員に継承し、外部機関との連携に改善を加えながら淡路三原高校らしい探究活動を継続していきたい。

第3章：カリキュラム実践と高大産官連携

本章では、文理探究科のカリキュラムに関して、まず今年度実施内容を示し、次年度以降の授業計画を提示する。また、その後、それらのカリキュラムが大学、企業、団体、行政とどのように関係し、新たな学びの場を創造するのかを説明する。

探究学際領域の充実を図るために以下を7単位で実施または実施に向け内容を検討中である。

教科(合計単位数)	授業名(学年/単位数)	主な内容	開始年度
「総合的な探究の時間」(4)	Sagas ラボ (1年/1単位)	探究活動のスキル養成	令和7年 (今年度)
	Sagas ゼミ (1年/2単位)	課題探究活動	令和8年
	Sagas プラス (3年/1単位)	課題探究活動のまとめ	令和9年
「探究」学校設定教科(3)	データサイエンス基礎 (1年/1単位)	Sagas ラボと連携して統計データの扱い方および分析スキル養成	令和7年 (今年度)
	読解 Integral (2年/2単位)	Sagas ゼミと連携した社会問題読解(日英)と発表活動	令和8年

上記以外の学校設定科目

教科(合計単位数)	授業名(学年/単位数)	主な内容	開始年度
「外国語」学校設定教科(4)	English in Use I (1年/2単位)	読解 Integral の素地として、基礎力の育成と社会問題への関心を高める	令和7年 (今年度)
	English in Use II (2年/2単位)	読解 Integral との連動、Sagas ゼミで使用する「伝える」力の育成	令和8年

*教育課程の編成については、令和7年度入学生における教育課程は p. 48 参照。

3.1 令和7年度文理探究科のカリキュラム実施内容

1) 「総合的な探究の時間」実施報告 報告者：〈理科〉米谷 真由美、出水 秀明、狭間 崇、立川 広大

■講座名：Sagas ラボ(毎週火曜6限)、対象生徒：文理探究科1年、1単位

■目的

- 単一の学問だけでは解決できない複雑なテーマを扱えるようになる。
- 異なる分野の知識を結び付けて、柔軟な思考力を育成する。

■概要

探究の基本的な進め方や基礎知識を学習し、理科の基礎実験を題材に、科学的なデータの解析方法について学び、レポートの書き方や発表のノウハウも身につける。さらに、近隣大学や研究施設における高度な実験装置を用いたより専門的な実験を経験し、最先端の研究に触れることで、進路について具体的に考えるキャリア教育も実施する。



一学期はすべての分野の研究の土台となる基礎知識について講義、実習を行った。二学期から三学期にかけては、本校において基礎実験、及び吉備国際大学において大学レベルの内容につながる実験・実習を行った。


■実施内容（1学期～夏休み）

回	実施日	内容	補足・資料等
1	4/15	実験ノート及び『Sagas ラボ・課題探究手引書 2025』を配布した。Society5.0で必須となる「課題をみつけて解決していく能力」を身につけていくため、探究の4つのプロセスを解説した。文理問わず、研究不正は厳禁であることも嚴重注意した。	 <p>写真1. 手引書 2025 学年間の交流と研鑽を目的に、今年度はサイエンス2年と合同で行うことを想定した手引書となっている。</p>
2	4/22	研究テーマの設定について解説した。生徒が興味・関心を持っているキーワードについて、「マンダラチャート」を用いて関連するワードを書き出していった。生徒間での意見交換も行い、分野の広がりや自分の関心について気づききっかけとした。	<p>個人の活動でマンダラチャートを書いたのち、生徒間の意見交換を実施した。手が止まってしまうこともあったが、友人間で意見交換をすると「なるほど、それもあるのか」と気づく様子も見られた。</p>
3	5/13	実験ノートの存在意義と記入する上での注意点等を解説した。実験ノート記載上の細かいルールを自分でまとめ、実際に行った実験について実験ノートに記入した。実験ノートについてはこれ以降も随時活用し、担当教員によるチェックを行っている。	 <p>写真2. 実験ノート記入の様子 ボールペンを用いて、細かいルールを意識し、不明点は担当教員に確認しながら書き進めていた。</p>
4	5/27	2年生と合同で、「文献検索」と「参考文献の書き方」について講義と実習を行った。「文献検索」では、ドメイン検索やGoogle Scholarの使い方を学び、信頼に足る論文などの文献を入手する方法を身につけた。「参考文献の書き方」については、著作権と引用時のルールを解説し、SIST02スタイルを意識した引用文献の書き方を学習した。	<p>神戸大学図書館のHPなどを例に、情報リテラシーや引用文献の書き方については大学のどの学部の研究においても必須項目であることを伝えた。 『参考文献の役割と書き方』についてはSIST_booklet2011.pdfを教材として使用した。</p>
5	6/3		
6	6/10	レポート・論文・ポスターの書き方について、担当教員の学位取得時の資料を用いて、具体的に解説した。	<p>夏季特別実験においてレポート作成課題を実施した。</p>
7	6/17	特に理系で必須となる「測定」について解説した。月までの距離や細胞の大きさは、どのような道具を用いてどのように測定すると求められるのか考え、議論し、図示する活動を行った。生徒の解答例を右欄に示す。 また、文系においても、どのようなデータを集め、どのように解釈するかが大切であることも紹介した。	 <p>写真3. 生徒の考え 「月までの距離をどう測るか」</p>

8	6/24	「データを扱う際の注意」として、定量的データと定性的データの違い、誤差や有効数字の計算、適切なグラフ表記などについて解説し、実習を行った。	おもりの質量を変化させ固有振動数を測定した実験とある生物の生存個体数のデータについて、それぞれ考えられる事項を話し合い、結果を提出した。
9	7/1		
夏休み		各自一学期のポートフォリオを作成しながら、振り返りを行った。 また、夏期特別実験として生物の基礎実験を実施し、実験の組み立てから結果、考察までノートに記入し、レポートにまとめる流れを経験した。	生徒が記入したポートフォリオを教員が確認し、今後も意識的に取り組めるように促した。 生物の基礎実験内容をレポートにまとめ、提出させた。6/10の授業で学んだことを生かして、ルールに則って作成するよう促した。

■実施内容 (2学期～3学期)

回	実施日	内容	補足・資料等
10	9/9	物理実験班と生物実験班に分かれて、9/30に実施する内容の事前講習を行い、実験器具の準備などを行った。	実験内容に関連する内容の復習をした後、実験手順説明書をグループで読み、必要な器具の数の確認や条件の設定、器具の準備などを行わせた。 実験前に必ず予想を立てて、入念にシミュレーションを行うことを意識づけた。
11	9/30 2時間	【生物】生体触媒であるカタラーゼと無機触媒である酸化マンガンIVの働きが、温度やpHの条件によってどうなるのか、実験を通して学んだ。 【物理】弦巻ばねで成り立つフックの法則が、輪ゴムでも成り立つのか、実験方法をグループで考えて検証した。	写真4. 実験風景  前週に用意したものを使用して、実験や測定を行い、記録した。実験終了後、実験ノートに手順～考察まで記入してくるよう指示し、翌週までに必ず実験内容を整理するよう促した。
12	10/7	グループごとにわかれ、実験結果を再度確認し、なぜそのような結果になったのか、なぜ失敗した(他のグループと違う)のか考えをまとめ、発表した。	生徒が9/30の実験結果をまとめてきたうえでの事後指導である。なぜその結果になるのか、科学的な根拠にあたって思考を深められるよう促した。
13	11/25 1日	吉備国際大学において実習・実験を行った。 【午前】臨海実習棟にて、布川先生と松原先生から「ドローンでみた阿那賀地区の森と海」というタイトルで講義を受け、施設の見学等を行った。 【午後】志知キャンパスに移動し、「海藻多糖類『寒天』について」というタイトルで、南あわじ市沿岸でたくさん収穫されるテングサから抽出された寒天と精製寒天の違いを探る実験を行った。	写真5. 活動の様子 

14	12/2		<p>写真6. 生徒作成のポスター</p> <p>吉備国際大学で一緒に実習・実験内容を行ったグループで話し合いながら、要約・方法・結果・考察といった内容のポスターを作成した。作成はタブレットで行い、各自が発表できるように練習も行った。</p> <p>6/10の授業で学んだことを生かして、ルールに則って作成するよう促した。</p>
15	12/16	<p>前時に作成したポスターを用いて、異なる実習・実験を行った生徒でグループとなり、ポスター発表を行った。</p>	<p>自分が行った実習・実験を論理的に説明できるよう、工夫して発表させた。聞き手側にも、疑問に思ったことや分からない内容は質問できるよう、意欲的に発表を聞くように促した。</p>
16	1/13	<p>物理実験班と生物実験班に分かれて、1/20に実施する内容の事前講習を行い、実験器具の準備などを行った。</p>	<p>実験内容に関連する内容の復習をした後、実験手順説明書をグループで読み、必要な器具の数の確認や条件の設定、器具の準備などを行わせた。</p> <p>実験前に必ず予想を立てて、入念にシミュレーションを行うことを意識づけた。</p>
17	1/20	<p>【生物】生体触媒であるカタラーゼと無機触媒である酸化マンガンIVの働きが、温度やpHの条件によってどうなるのか、実験を通して学んだ。</p> <p>【物理】巻ばねで成り立つフックの法則が、輪ゴムでも成り立つのか、実験方法をグループで考えて検証した。</p>	<p>前週に用意したものを使用して、実験や測定を行い、記録した。実験終了後、実験ノートに手順～考察まで記入してくるよう指示し、翌週までに必ず実験内容を整理するように促した。</p>
18	1/27	<p>3/17-18に予定されている兵庫県立西はりま天文台で行う天体観測に向けての講義を行った。</p>	<p>「なゆた」望遠鏡で観察してみたい星や星雲などの天体について調べさせた。グループ内で共有し、最も興味をもった天体についてグループで観察することにした。</p>
19	2/3	<p>グループごとにわかれ、1/20の実験結果を再度確認し、なぜそのような結果になったのか、なぜ失敗した(他のグループと違う)のか考えをまとめ、発表した。</p>	<p>生徒が実験結果をまとめてきたうえで事後指導である。なぜその結果になるのか、科学的な根拠にあたって思考を深められるよう促した。</p>

■ 1年間のまとめ講座

【1回目：2/10】

探究活動を「何となくやった」で終わらせないために、生徒が「探究＝手順のある思考活動」だと再認識するための、振り返りと言語化活動を行った。

<p>導入 (10分)</p>
<p>発問「1年間の授業で、一番大変だったのはどこ？」</p>
<p>➡ 個人で短く記述</p>
<p>➡ 数名共有 (失敗経験が大事)</p>

展開①：研究の流れを整理（20分）
ワーク①（個人）穴埋め形式 ① 実験に先立って抱いた疑問： ② 予想をたてられたか： ③ 工夫したこと： ④ 困ったこと： ⑤ わかったこと： ※「④困ったこと」は必ず書かせる。
展開②：クラスで「共通点探し」（15分）
ロイロノートで共有し、 ❖ 困ったことに共通点は？ ❖ 予想と結果は一致した？ ❖ 途中でやり方を変えた人は？ ※「探究＝一発で成功しない」「考え直すことが探究・研究」ということに気付かせる。
まとめ（5分）
探究は「正解探し」ではなく、考え方の練習である。
【2回目：2/17】
探究活動で育った力を実感するため、身についた考え方や力について言語化した。探究経験に意味付けをし、次年度のSagasゼミへの橋渡しの時間とした。
導入（5分）
発問「Sagas ラボ」をやる前の自分と、今の自分は何が違う？」
展開①：身についた力の棚卸し（20分）
ワーク② 次から当てはまるものに○+具体例 <input type="checkbox"/> 疑問を見つける力 <input type="checkbox"/> 予想を立てる力 <input type="checkbox"/> 失敗してやり直す力 <input type="checkbox"/> データを見る力 <input type="checkbox"/> 話し合う力 ※個人ワーク後、ペアやグループで共有し、互いに認め合えるように促す。
展開②：高2への予告（15分）
次年度のSagasゼミでは、自分で問いを深めていく。 そのとき、今日自覚した力が土台になる。
まとめ（10分）
探究は才能ではなく、練習でうまくなる。 「探究の入り口」に立った。次年度も楽しもう。

■評価方法

対象：ループリックによる振り返りと実験ノートの内容

	実験のやり方	実験ノートへの記録	考察のレベル
優	手順を正確に理解し、安全に配慮しながら主体的に実験を進めていた。	観察内容を具体的に整理し、図や数値を用いて分かりやすく記録できていた。	結果を根拠に論理的に説明し、課題や次の展開を示すことができた。
良	基本的な操作はできていたが、確認不足により効率性に課題が見られた。	必要事項は記録できていたが、表現や整理に改善の余地があった。	結果の説明はできたが、根拠や関連付けが十分ではなかった。
可	手順理解が不十分で、指示を受けながら進める場面が多かった。	記録が断片的で、後から内容を理解するのが難しい部分があった。	結果の記述にとどまり、考察が浅く発展的な視点は見られなかった。

■今後の課題

多くの生徒が、次年度の探究につながる基礎を身につけることができているように感じられる。今後は、データサイエンス基礎など他科目との連携もさらに図り、複数教科で関わるができるような環境づくりをしていきたい。そのため、担当教員の人数は今年度レベルを維持し、手厚く指導ができるようにしたい。また、これまでのサイエンスコースで実施していた「課題探究」とは異なり、1年生で吉備国際大学の講座を受けることになるため、受講できる内容に制限が出てくる。より有意義な時間にできるよう、タイミングなどを考え直す必要がある。

2) 「探究」学校設定科目 実施報告 報告者：〈数学〉林 友哉、〈情報、数学〉宮尾 文明

■講座名：データサイエンス基礎（毎週木曜2限）、対象生徒：文理探究科1年、1単位


■目的

日常にあふれている事象を積極的にデータ化して、分析や推測を行うなど、既習の内容を様々な場面に結びつけようとする姿勢を身に付けさせる。

■概要

データの分析や統計的な推測で学習する内容を与えられたデータや実験で得られたデータから学習していく。また、自分の身の回りの事象を数学的に捉え、関連するデータなどをもとに、その特徴や変化を考察し、自分の意見を述べることや新たな問題提起ができることを目指す。

■1学期実施内容


回	実施日	内容
1	4/17	オリエンテーション 授業の目的・進め方のガイダンスを聞く。
2	4/24	データの整理と代表値 度数分布表やヒストグラムを理解する。平均値や中央値、最頻値の定義や意味を理解し、それらの数値を求める。
3	5/1	データの散らばりと四分位数 範囲や四分位範囲の定義やその意味を理解し、それらの数値を求める。また、箱ひげ図かき、データの分布を比較する。
4	5/8	分散と標準偏差
5	5/15	偏差、分散、標準偏差の定義とその意味を理解し、求める。
6	5/30	特別講義：「小指ギャップ」を教材とする統計処理の実験 講師：鳴門教育大学准教授 藤原大樹
7		 <p>足の小指をぶつけるのはなぜかという日常的問題場面から、提示された仮設について、実験の観測データをまとめ、グラフや代表値等を用いて考察した。さらにデータを読み解く中で、気づいたことや疑問に思ったことをもとに、独自の仮説を設定し考察した。</p>
8	6/5	2つの変量の間関係 相関係数の定義とその意味を理解し、定義にしたがってその数値を求める。相関係数は散布図の特徴を数値化したものであること、数値化して扱うことのメリットを理解する。
9	6/19	
10	6/26	仮説検定の考え方 仮説検定の考え方を理解し、具体的な事象に当てはめて考えることができるようになる。

11	7/11	データの分析の問題演習 度数分布表や箱ひげ図、散布図などからデータの特徴を読み取る。
----	------	---

■ 2 学期実施内容

回	実施日	内容
1	9/4	確率変数と確率分布 用語や記号の意味を理解し、確率分布を求める。
2	9/11	確率変数の期待値と分散・標準偏差 確率分布の表を活用し、期待値と分散・標準偏差を求める。
3	9/16	
4	9/25	
5	10/3	統計データの収集と整理の演習 RESAS と e-Stat を活用し、課題に必要な統計データを条件を絞りながら調べた。また、調べた統計データについて、Excel を活用して整理し、グラフ化しながら変化を視覚化した。
6	10/9	
7	10/23	確率変数の期待値と分散・標準偏差 確率分布の期待値 $E(X)$ や分散 $V(X)$ の計算式理解し、活用してそれらの数値を求める。
8	10/30	確率変数の和と積
9	11/6	同時分布の意味を理解し、2つの確率変数の同時分布を求める。
10	11/14	 <p>特別講義：「北極域の海氷域面積」を教材とする分析処理の演習 講師：鳴門教育大学准教授 藤原大樹</p> <p>数学ソフトウェア GeoGebra を活用して北極域の海氷域面積に関するデータをグラフ化し、数年後どうなるのかを予測し考察した。また、考察結果を報告レポートにまとめる活動を通して、分析結果を提示するポイントや工夫の仕方について学んだ。</p>
11		
12	11/20	確率変数の和と積
13	11/27	複雑な確率分布の期待値を、確率変数の和の期待値を利用して求める。また、独立な確率変数の積の期待値を求める。
14	12/4	
15	12/19	確率変数と確率分布の問題演習 さいころを用いた具体的な場面において確率分布を求め、表を活用して確率変数の期待値や分散・標準偏差を求める。

■ 3 学期実施内容

回	実施日	内容
1	1/15	発表準備 物理実験「共鳴による振動数測定」で得られた結果について、グループごとにデータ処理を行った。その結果をグラフ化するなど工夫してまとめ、発表資料を作成した。
2	1/30	 <p>発表会 指導助言：鳴門教育大学准教授 藤原大樹</p> <p>グループごとに発表を行った。質疑応答の時間では、生徒同士で積極的に質問が飛び交い、相互に内容を深めることができた。また、発表に対する講評・助言をいただき、資料のまとめ方や提示の仕方の工夫だけでなく、探究の基盤である「科学的であること」の重要性を講話していただいた。</p>
3		

4	2/5	発表の振り返り 指導助言していただいた内容を踏まえて、各グループの発表資料をブラッシュアップした。
5	2/12	1年間のまとめ 統計データの処理について既習内容を振り返った。また、データの整理の仕方や統計的な推測のための視点、発表技能について共有した。

■評価の観点と基準

知識及び技能	思考力・判断力・表現力等	学びに向かう力・人間性等
実社会に必要な数学の知識や技能を身に付けるとともに、与えられたデータを分析したり、統計的に推測したりすることができる。	実験などで得られたデータを分析した結果を基に、自分の意見を述べることや新たな問題提起をすることができる。	実験などで得られたデータを積極的に分析をする姿勢や統計的に推測する姿勢がみられる。
知識・技能テスト (50) 授業中のワークシート (30) 確認テスト (20)	思考力に関するテスト (50) 授業中のワークシート (20) レポート課題 (30)	レポート課題及び発表資料 (50) 発表等の相互評価 (30) 振り返りシート (20)

■今後の課題

当初、学校設定科目「Sagas ラボ」で行った実験で得られるデータを分析処理する予定であったが、数値化されるような実験が少なく、予定通り着手できなかった。実験内容の共有が課題である。また、コンピュータ（ソフトウェアも含む）の操作に時間がかかるため、演習の時間を多く取れるよう計画したい。

3) 「外国語」学校設定科目 実施報告 報告者：〈外国語〉芝 彩紗、藤原 章子

■講座名：English in Use I（毎週月曜 5 限、金曜 5 限）、対象生徒：文理探究科 1 年、2 単位

■目的

国内外のショートニュースに焦点を当て、聞いたり読んだりすることで読解力、表現力を育成する中学校での既習文法事項を確認、さらに高校文法を日常場面でいかに使用するか意識しながらニュース英文などを正確に読み取る読解力を身に付けさせる。また、そのニュースを要約し、それに対する自分の意見を英文で表現することで、アウトプットする力を身に付けさせる。

最終目標として、2 年次探究科目である「読解 Integral」への移行の準備として進める。

■概要

文理探究科 2 年で行う「読解 Integral」、「Sagas ゼミ」において、英語を情報収集や発表手段として使用するため、日常のニュース記事などで探究的素養を育成しながら、英語の総合的技術向上を行う。中学校で学んだ文法事項を使って、話したり、書いたりしながら、伝わりやすい英語の習得を目指す。

■年間実施内容

学期	月	内 容	時間数	評価方法
1	4 月	オリエンテーション	7	<ul style="list-style-type: none"> Writing 課題 小テスト 定期考査
		Topic: Behavior		
		Grammar: 動詞の現在形、頻度を表す副詞		
		Reading: skim reading		
		Speaking: 日常の頻度について		

2	5月	Topic: Ways of learning	7	
		Grammar: 現在進行形, 副詞への変形		
		Speaking: 絵図の説明		
		Listening: 電話での会話		
	6月	Topic: Technology	9	
		Grammar: 動詞の過去形		
		Reading: キーワードの見つけ方		
		Listening: ラジオ番組		
		Speaking: 過去の出来事について話す		
	7月	Topic: Appearance	4	
		Grammar: 過去形の疑問文と否定文		
		Reading: 文脈から単語の意味を推測する		
2	9月	Topic: Work	8	<ul style="list-style-type: none"> ・Writing 課題 ・プレゼン ・小テスト ・定期考査
		Grammar: 未来を表す"will", "be going to"と現在形		
		Writing: 形式的な手紙		
		Reading: 速読		
	10月	Topic: Health	9	
		Grammar: 不定詞		
		Speaking: プレゼンテーション		
		Reading: 目に見える情報をもとに内容を予測する		
	11月	Topic: Happiness	9	
		Grammar: 比較級と最上級		
		Writing: 要約		
		Speaking: 類似と比較		
12月	Topic: Home	4		
	Grammar: "must", "have to"			
	Writing: エッセイ、レポート			
3	1月	Topic: Travel	8	<ul style="list-style-type: none"> ・レポート ・小テスト ・定期考査
		Grammar: 完了形		
		Writing: エッセイ、レポート(12月からの継続)		
	2月	Topic: Free time	5	
		Reading: 5W1H の読み解き方		

■評価の観点と基準

知識及び技能	思考、判断、表現力等	学びに向かう力、人間性等
英語での読解や表現に必要な文法や語彙についての知識を身につけ、適切に使用することができる。	英文を正確に読み取り、要旨や論点を整理して情報や考えなどを英語で適切に伝えることができる。	身近なニュースを通して、自身の考えを深めようとしたり、その考えを他者と積極的に共有し、英語でコミュニケーションを取ろうとしている。
<ul style="list-style-type: none"> ・小テスト ・定期考査 ・レポート 	<ul style="list-style-type: none"> ・定期考査 ・Writing 課題 ・プレゼンテーション ・レポート 	<ul style="list-style-type: none"> ・Writing 課題 ・プレゼンテーション ・レポート

3.2 来年度以降実施開始のカリキュラム計画内容

1) 「総合的な探究の時間」Sagas ゼミ（令和8年度～）、Sagas プラス（令和9年度～）実施計画

■講座名：Sagas ゼミ、対象生徒：文理探究科2年、2単位

■担当教科等：理系教科2名、文系教科1名

目的	身近にある疑問からテーマを設定し、その答えを探す。文献検索を丁寧に行い、疑問から新たな疑問を創造する循環を繰り返し、丁寧にリサーチクエスチョンを設定する。検証方法においても、その手法や倫理的配慮を学び、多様な観点から考察を行う。探究活動を自分のキャリアのスタート地点と位置付けられるような活動とする。
内容	<ul style="list-style-type: none"> ・興味関心をもとに研究内容を決定 ・文献検索、予備実験、リサーチクエスチョンの設定 ・複数の教員や校外指導者による口頭試問 ・研究計画の設定 ・実験やフィールドワークの実施 ・考察と発表活動
補足	<ul style="list-style-type: none"> ・時間割は2時間連続で実施 ・活動人数は1～4名 ・教員は年間スケジュールを提示する。テーマ設定から発表までの連続した活動とするが、探究心や進行状況に配慮し、そのスケジュールは最終的には「個人」の裁量とし、納得解を最優先とする。

シラバス

学 期	指導内容	学習内容	時 数	評価方法
1	<ul style="list-style-type: none"> ・オリエンテーション ・テーマの提示 ・課題レポート（文献調査） ・研究テーマ・グループ決定 ・キーワード検索 ・リサーチクエスチョン設定 ・リサーチクエスチョン再考 ・文献収集と調査 	<ul style="list-style-type: none"> ・学びの目的と計画の提示 ・担当教員がそれぞれテーマを示し、生徒は興味に応じて選択する。ワークシートに記録。 ・テーマについて知っておいてほしい事柄について文献と複数の問いを提示する。それを読み、問いに関して考えたことを授業で共有し、議論する。 ・テーマを元に共同で研究するグループをつくり（1人でもよい）、具体的なテーマ設定を行う。 ・テーマを理解するために知るべき事柄「～とは？」を設定し、調べる。必要であれば、予備実験なども行う。 ・調べてもわからない、はっきりしない価値のある問いを、5W1Hを使って立てる。大学教員に助言をもらい、問い立てが適切であるか検証する。 ・夏季休業中の課題を整理する。 	1 2 8 2 6 4 2	3 観点（優良可）

2	・面談	・夏休みの成果を面談で発表する。	2	3 観点 (優良可)
	・研究計画	・その後、必要な実験やフィールドワークなど、検証手法を検討、研究計画を立てる。	4	
	・実験・フィールドワーク・データ分析	・実験、フィールドワーク、ヒヤリングデータ分析などを実施。 記録が正しく行えているか確認し、指導教員、班員と情報共有をする。	12	
	・考察	・検証結果を元に考察し、内容を高校・大学教員に内容を発表し、質疑応答する。不足点をまとめる。	6	
	・中間発表	・これまでの成果をクラス内と1年生に向けて発表し、不十分な点を改善、検討する。	2	
	・追加実験・調査検討	・中間発表で問題になった点について、追加の実験や調査を検討する。	2	
3	・追加実験・調査	・追加の実験や調査を実施する。	8	3 観点 (優良可) ループリック自己評価
	・まとめ、最終発表準備	・これまで得られた結果をまとめ、最終発表の準備をする。	6	
	・最終発表	・最終発表はポスターセッション形式で実施する。大学教員(2名)からも講評をいただく。	3	

■講座名：Sagas プラス、対象生徒：文理探究科3年、1単位

■担当教科等：理系教科2名、文系教科1名

目的	Sagas ゼミの内容を各生徒が振り返り、論文形式で記録する(A4用紙8枚程度)。自己の思考を振り返り、最終的に改善方法と新たな疑問を提起する。教員や校外の指導員との面談を通じて、新たな自己の発見や進路開拓に活用する。
内容	<ul style="list-style-type: none"> ・項目ごとに研究内容を記録 ・要旨の作成(英語) ・教員、外部指導者との面談、口頭試問 ・進路選択との関連性や志望動機への反映 ・小論文作成

シラバス

学期	指導内容	学習内容	時数	評価方法
1	・オリエンテーション (論文作成)	学びの目的と計画の提示	1	3 観点 (優良可)
	1. 第1章	1. <u>第1章</u>	2	

	<p>研究の背景～リサーチ・クエス ション</p> <p>2. 第2章 研究方法について</p> <p>3. 第3章 結果と考察</p> <p>4. 第4章 結論～引用文献</p> <p>5. 要旨作成【英語】</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・必要な資料を精査して、論理的に展開する。 2. <u>第2章</u> ・手順や方法をわかりやすく記す。 3. <u>第3章</u> ・使用する資料の精査を行い、効果的かつ公正に検証する。 4. <u>第4章</u> ・不足点を発掘しながら、論理的にまとめる。 5. <u>要旨作成【英語】</u> ・完成した論文を推敲し、さらに必要な事柄を明確に英語で記述する。 	<p>2</p> <p>3</p> <p>2</p> <p>2</p>	
2	<p>〈口頭試問とキャリア連携〉</p> <p>1. 共有とディスカッション 【対生徒】</p> <p>2. 口頭試問 【対教員】</p> <p>3. 探究課題とキャリアの連携 【個人ワークと面談】</p>	<p>1. <u>共有とディスカッション</u> ・同様のテーマ、異なるテーマなど、立場を変えて、他者と共有する。 ・テーマをディスカッションの材料として意見交換を行う。</p> <p>2. <u>口頭試問</u> ・高校・大学教員(3)に内容発表し、質疑応答する。 *()内の数字は大学教員の授業時間数 ・態度、言葉などに留意し、相手を納得させる表現方法を身につける。</p> <p>3. <u>探究課題とキャリアの連携</u> ・探究課題と進路とのつながりを強化し、小論文作成や進路先の決定など、高校・大学教員に助言をもらいながらキャリア開拓を行う。</p>	<p>4</p> <p>2</p> <p>8</p>	3 観点 (優良可)
3	<p>〈探究課題とキャリア連携〉</p> <p>1. <u>探究課題とキャリアの連携</u></p>	<p>1. <u>探究課題とキャリアの連携</u> ・2 学期に設定したキャリア課題に対して、各自が PDCA サイクルで取り組む。教員との面談を通して、助言を得ながら目的を明確にして学び続ける。</p>	9	3 観点 (優良可)

2) 「探究」学校設定科目 読解 Integral (令和8年度～) 実施計画

■講座名：読解 Integral、対象生徒：文理探究科2年、2単位

■担当教科等：国語科1名、外国語科1名

目的	科学倫理、経済、社会問題の文献購読を行い、思考を整理し、意見をまとめる。日本語、英語文献で共通トピックを扱うことで、背景知識の習得と他教科での既習知識との関連を見出す。英語で要旨作成を行い、日本語で意見発表する。
内容	<ul style="list-style-type: none"> ・大学教員からのトピック提示 ・日本語、英語文献の読解演習 ・リサーチのための自由文献検索（日英） ・まとめと意見の発表 ・大学教員からの評価と振り返り
補足	時間割は2時間連続で実施

シラバス

学期	指導内容	学習内容	時数	評価方法
1	オリエンテーション	学びの目的と計画の提示	1	講読ノート (30) 発表資料 (20) ビデオ提出 (20) 発表 (30)
	〈倫理分野〉			
	1. 課題提示	1. <u>課題の理解</u> ・課題について大学教員から紹介	2	
	2. 日本語・英語文献の読解 導入) 課題文献	2. <u>読解・整理・分析</u> ・課題文献の読解方法を学ぶ。	12	
	3. 思考の整理・分析 発展) 自由文献検索	3. <u>文献検索とディスカッション</u> ・日英の関連文献を探し、読解する。 ・意見交換し、思考を深める。	4 2	
4. ポスターによるまとめ・発表	4. <u>まとめ・表現</u> ・大学教員に助言をもらいながら、ポスターに意見をまとめる。 ・自分の考えを日英で表現し、論理的に発表し、質問に答える。	2		
5. 振り返り	5. <u>講評と振り返り</u> ・大学教員から上記まとめへの講評をいただく。	1		
2	〈人口政策分野〉			講読ノート (30) 発表資料 (20) ビデオ提出 (20)
	1. 課題提示	1. <u>課題の理解</u> ・課題について大学教員から紹介	2	
	2. 日本語・英語文献の読解 導入) 課題文献	2. <u>読解・整理・分析</u> ・課題文献の読解方法を学ぶ。	16	
3. 思考の整理・分析 発展) 自由文献検索	3. <u>文献検索とディスカッション</u> ・日英の関連文献を探し、読解する。	7		

	4. ポスターによるまとめ・発表 5. 振り返り	<ul style="list-style-type: none"> ・意見交換し、思考を深める。 4. <u>まとめ・表現</u> <ul style="list-style-type: none"> ・大学教員に助言をもらいながら、ポスターに意見をまとめる。 ・自分の考えを日英で表現し、論理的に発表し、質問に答える。 5. <u>講評と振り返り</u> <ul style="list-style-type: none"> ・大学教員から上記まとめへの講評をいただく。 	2 1	発表 (30)
3	〈経済・環境分野〉 1. 課題提示 2. 日本語・英語文献の読解 導入) 課題文献 3. 思考の整理・分析 発展) 自由文献検索 4. ポスターによるまとめ・発表 5. 振り返り	1. <u>課題の理解</u> <ul style="list-style-type: none"> ・課題について大学教員から紹介。 2. <u>読解・整理・分析</u> <ul style="list-style-type: none"> ・課題文献の読解方法を学ぶ。 3. <u>文献検索とディスカッション</u> <ul style="list-style-type: none"> ・日英の関連文献を探し、読解する。 ・意見交換し、思考を深める。 4. <u>まとめ・表現</u> <ul style="list-style-type: none"> ・大学教員に助言をもらいながら、ポスターに意見をまとめる。 ・自分の考えを日英で表現し、論理的に発表し、質問に答える。 5. <u>講評と振り返り</u> <ul style="list-style-type: none"> ・大学教員から上記まとめへの講評をいただく。 	1 9 5 2 1	講読ノート (30) 発表資料 (20) ビデオ提出 (20) 発表 (30)

3) 「外国語」学校設定科目 English in UseⅡ（令和8年度～）実施計画

■講座名：English in Use Ⅱ、対象生徒：文理探究科2年、2単位

■担当教科等：外国語科2名

目的	国内外のショートニュースに焦点を当て、聞く、読む、話す、書くすることで読解力、表現力を育成する。文法や表現方法を確認し、日常場面でいかに使用するか意識しながらニュース英文などを正確に読み取る読解力を身に付けさせる。また、与えられた英文を自分なりの言葉で言い換えて人に伝えられることを目標とし、様々な表現方法を自律的に学ぶことを実践する。
内容	教育内容は、英語コミュニケーションⅡ、探究科目「読解 Integral」、総合的な探究の時間での探究活動と紐づけ、総合的に実践的英語力の育成を図る。

学期	月	内 容	時間数	評価方法
1	4月	オリエンテーション	7	<ul style="list-style-type: none"> • Speaking 課題 • Writing 課題 • 小テスト • 定期考査
		Topic: Extreme weather		
		Expression: 時制、used to、同意		
		Reading: 会話文、メール文、ニュース記事		
	5月	Speaking&Writing: 内容要約、過去の習慣	7	
		Topic: Ways of living, Stress		
		Expression: 助動詞 (義務、習慣)		
		Reading: インターネット記事、会話文、Blog		
	6月	Speaking&Writing: 内容要約、義務	9	
		Topic: Art		
		Expression: 動名詞、不定詞の表現		
		Reading: ニュース記事、チラシ		
	7月	Speaking&Writing: 内容要約、好きなこと	4	
Topic: Adventure				
Expression: 完了形、go のつく表現				
2	9月	Reading: 内容要約、リスト	8	<ul style="list-style-type: none"> • Writing 課題 • プレゼン発表 • 小テスト • 定期考査
		Topic: Fears		
		Expression: 条件節、助動詞 (可能性)		
		Reading: インターネット記事、How to 記事		
	10月	Speaking&Writing: 内容要約、状況把握、メール文	9	
		Topic: Decision Making		
		Expression: 仮定法過去		
		Reading: 新聞記事、Discussion		
	11月	Speaking&Writing: 内容要約、意見、説明文	9	
		Topic: The environmetnt and materials		
		Expression: 受動態		
		Reading: インターネット記事、新聞記事		
	12月	Speaking&Writing: 内容要約、説明文	4	
Topic: Natural disasters				
Expression: 過去と過去完了				
3	1月 2月	Reading: インターネット記事、Instruction	13	<ul style="list-style-type: none"> • Speaking 課題 • Writing 課題 • Presentation • 小テスト • 定期考査
		Topic: Goals and achievement		
		Expression: 話法、計画		
		Reading: インターネット記事		
		Speaking&Writing: 内容要約、論理表現、計画		
Presentation: My goal				

評価方法	<p>【知識・技能】 授業で扱った文法、英単語を理解し、正確に使用している</p> <p>【思考・判断・表現】 授業で扱った内容を理解し、それに対する自分の意見をライティング課題やエッセイ、口頭表現によって伝えることができる。</p> <p>【主体的に学習に取り組む態度】 ニュースのトピックに関して積極的に質問をし、理解しようとしている。また、自分の考えを英語で他者と共有し、理解を深めようとしている。</p>	計 70	
------	--	------	--

3.3 探究活動に関わる連携機関

1) 地域連携

a. 南あわじ市

令和3年度より南あわじ市と連携協定を結び、生徒の探究活動に関わる支援などを受けている。毎年2年生を中心に支援を受けており、今年度は、キャリア類型において、南あわじ市役所の5部課と直接連携を図り、地域に密着した課題解決に取り組んだ。また、サイエンスコースとアカデミア類型にも自走型で協力支援をいただいた。

7月にはSagasⅡ（総合的探究の時間）「Sagas 問答」で、リサーチクエストに対する口頭試問を、市役所員が本校教員とペアで、事前準備の上、指導にあたった。同23日には市長や市役所職員、地域住民を招いて、「Sagas 地域発表会」を開催し、探究活動への助言と激励をいただいた。

高校生に対する地域からの期待は大きく、今後はこの支援を文理探究科2年の「Sagas ゼミ」で活用できるよう調整を図り、地域課題から深い学びを実施できるように計画したい。

b. 地域内高大連携協定

淡路島内の高等教育機関との連携協定に基づき、講師派遣、施設使用などの協力を得ている。

連携先：吉備国際大学、関西看護医療大学、関西リハビリテーション専門学校

2) 地域外連携

a. 独立行政法人中小企業基盤整備機構

本年度から中小機構の「起業家教育プログラム」に採択され、SagasⅡにおいて、24名がアントレプレナーシップ教育に関する授業プランの提供と2回の講師派遣を受けた。また、プログラムのなかで、日本郵政金融公庫からも担当者をつけていただき、収支報告やビジネスプランに関する細かいアドバイスを得た。普通科で学ぶことのできない分野について講義、実習を受けられたことは教員にとっても有意義であった。生徒の身近な疑問や不満をビジネスに生かすという方法は、地域問題に目を向けるきっかけとなり、探究活動で問いを立てる際にも具体性を伴う内容となった。

また、科学分野以外の探究活動については、外部発表の機会も限られているが、ビジネスプランに関しては自治体、企業とも熱心であり、コンテスト応募の機会を得られたことが生徒の動機づけ

となった。来年度も引き続き採択が決定しており、文理探究科2年の「Sagasゼミ」のカリキュラム研究材料として、探究活動指導の参考としたい。

今後も本校探究活動の特徴として、基礎研究のように生徒の純粋な探究心を追求できるプログラムと、社会貢献や経済活動を念頭に置いた実学的探究プログラムの両輪で全体カリキュラムをバランスよく作成したい。

■ 起業家教育プログラムに関わる講師派遣

日付	所属・役職	講師名	内容	場所
4/23 9/3	中小機構中小企業アドバイザー	鈴木 健	ビジネスプランの立案 プロトタイプ作成	本校
6/18 9/16	日本政策金融公庫 国民生活事業 神戸創業支援センター 上席所長代理	津田 知明	ビジネスプランの検証 収支計算の仕方	本校 オンライン

■ 参加ビジネスコンテスト：

- ・日本政策金融公庫 高校生ビジネスプラン・グランプリ
- ・株式会社 リクルート 高校生 Ring
- ・株式会社 マイナビ マイナビキャリア甲子園
- ・兵庫県 大阪府 スタートアップチャレンジ甲子園

このうち、高校生 Ring では「テーマ100選」に2グループ、また、マイナビキャリア甲子園は1グループが準決勝に進出し、東京で発表を行った。すべてのグループが身近な問題や地域視点を持つアイデアであったことから、来年度から始める文理探究科2年「Sagasゼミ」でも取り組みの一つとしたいと考えている。

b. 日本経済新聞社

令和5年度より、日本経済新聞社主催「日経 STEAM シンポジウム」へ継続参加しており、今年もコンテスト3部門を含めて、2年サイエンスコース全員が現地参加した。日経 STEAM では、4月から7月まで大学教員や社会で活躍する人物から定期的にオンラインで指導を受けることができ、全国の高校生や大学生と繋がりを持てる貴重な場でもある。

なお、日本経済新聞社からは全校生と教員に対して、キャリア形成と探究活動を目的として、日経オンラインの購読サービスの無償提供を受けている。

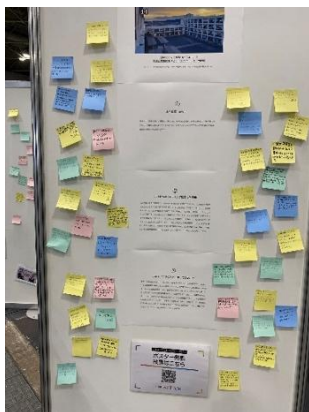
■ 日経 STEAM シンポジウム

日程：令和7年8月8日（金） 場所：インテックス大阪

今年度参加部門：「ステージ発表 私たちは問う 自由で豊かな未来のために」

「探究ポスター発表 アイデアの泉」*アドバイザー特別賞受賞

「デジタルアート展示・発表会」



アドバイザー特別賞
兵庫県立淡路三原高等学校
チーム名：三原革命軍

京都大学宮野公樹先生のご指導の下、「常識を疑え！」を合言葉に、自分たちの問いを文書で伝えた。学校名は非公開で、オーディエンスは付箋でコメントを書きあった。

3) 特別講師活用状況

■目的：文理探究科の授業、Sagas II ゼミ活動、およびキャリア形成のための特別授業

■対象：1年文理探究科 2,3年サイエンスコース、その他希望者など

日付	所属・役職	講師名	内容	場所
6/30 11/14 1/30	鳴門教育大学大学院 学校教育研究科 准教授	藤原 大樹	データサイエンス基礎 特別講師	本校
7/24	関西看護医療大学看護学部 准教授	西村 由美子	国際保健に関するワークショップ	本校
10/29	アイ・エス・ネクスト(株) 代表取締役	酒井 貴弘	地域から農業起業を行う課題点に関する講義	本校
11/25	吉備国際大学農学部地域創生農学科 教授	桧原 健一郎	Sagas ラボ 分野別講義、実験及び施設見学	吉備国際大学
3/4	(株)大塚製薬工場メディカルフーズ研究所	林田 尚輝	Sagas ラボ特別講義 研究内容に関する授業	本校

3.4 その他探究活動に関わる実践活動

1) Sagas ツアー（令和5年度より継続実施）

■対象：文理探究科1年、サイエンスコース2,3年

■コンセプト：「参加も自由、行き先も自由の夏の冒険旅行」

■行先：大阪（1泊2日）、広島（1泊2日）、東京（2泊3日）

■内容：*成果ポスターは巻末資料参照

日付	ツアー	内容
7/28	大阪	・大阪万博
7/29		・大阪大学文学部と教養科目授業特別参加、大阪大学博物館見学

7/30 7/31	広島	<ul style="list-style-type: none"> ・広島大学特別講義 ・広島平和資料館見学 ・マツダ株式会社マツダミュージアム見学と企業訪問、座談会
8/25 ~27	東京	<ul style="list-style-type: none"> ・富士通株式会社「未来の語り場」社員との座談会 ・JAXA スペースドーム見学 ・筑波大学特別講義 ・東京海洋大学特別講義、研究室訪問、大学院生との座談会、大学内博物館見学

■ツアーでの特別講師：

日付	所属・役職	講師名	内容	場所
7/29	大阪大学全学教育推進機構 教授	中村 征樹	科学倫理に関するワークショップと大学授業「ビブリオバトル入門」「科学論講義」参加	大阪大学
7/30	広島大学大学院社会科学研究科 准教授	松永 京子	原爆文学のワークショップ	広島大学
8/7	マツダ（株）技術本車体技術部 部長	谷本 康成	施設見学および技術、調達担当者との座談会	本社
8/25	富士通（株）総務本部 コミュニティ推進室 室長	井口 雅之	キャリア形成を目的とするワークショップ	本店
8/26	筑波大学人文社会系 教授	星野 豊	学校トラブルと法律の講義と施設見学	筑波大学
8/27	東京海洋大学学術研究院 教授	佐野 元彦	魚類の病気に関する講義、大学院生との座談会、ワークショップ	東京海洋大学

■参加者によるアンケート結果

ツアー参加者全員が4件法で回答

「Sagas ツアーに参加してどうでしたか。」(人)

	とてもよかった	よかった	どちらとも言えない	よくなかった
大阪	22	6	0	0
広島	9	0	0	0
東京	14	5	0	0

コメント抜粋：

「今まで自分が考えたことのないことに興味を持って可能性は無限大なんだ、ということを感じました。」

「今私たちが当たり前前に過ごせている毎日を大切に生きていきたいと思いました。」
「自分が大切にしていけないといけないこと、自分の芯になる部分が何なのかを確認することのできる良い機会になった。」
「全てが初めての体験で大学生の凄さに圧倒された。」
「世界の課題や最先端の研究、技術に触れ、自分の将来について積極的に考えるようになったことが1番大きな成長だと思います。」

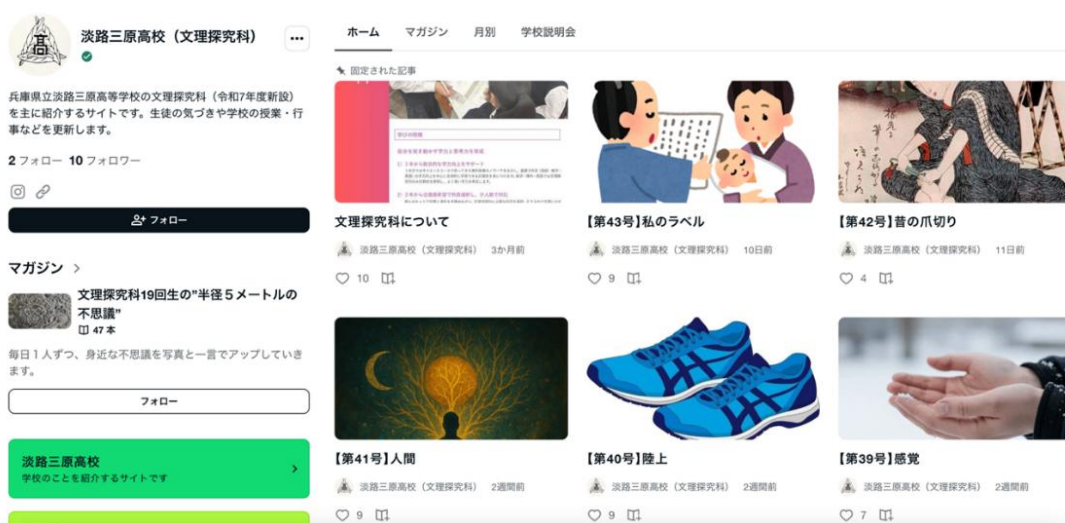
2) 冬の研修旅行

- 対象：文理探究科1年
- 行先：西はりま天文台、東芝デバイス&ストレージ株式会社姫路半導体工場
- 内容：

日付	所属・役職	講師名	内容	場所
3/17	西はりま天文台自然科学研究所 研究員	戸塚 都	天体観測と記録	西はりま天文台
3/18	東芝デバイス&ストレージ株式会社姫路半導体工場 工場長	高野 彰夫	半導体工場の見学 ワークショップ	姫路工場

3) 文理探究科 note

- 対象：文理探究科1年
 - 目的：2年「Sagas ゼミ」の問い立てトレーニングとして、身近な不思議に目を向け、発信する。
- ウェブサイト「note」を使用し、「半径5mの不思議」を日誌形式でリレー発信中。今後は、取り組みの普及に向け、発信の仕方も検討する。



3.5 学習環境の整備

選択教室を2教室改装し、以下のような設備を持つ「探究ラボ」として整備した。

■設 備：壁面大型スクリーン、電子黒板、iMac 8台、3Dプリンター1機、VRゴーグル2台、可動式wifi、可動式縦型ホワイトボード8台

■主な用途：
・文理探究科の授業
・特別講師を招いての授業、またはオンライン授業
・Sagasゼミやその他設備を使用する探究授業
・放課後の主体的探究活動

■使用状況：探究活動や特別講師の授業で積極的に活用した。ICT機器を利用したオンラインでの特別授業の回数が大幅に増え、遠隔地でも十分に講師とのやりとりができる環境となった。今年度は外部コンテスト参加者数も前年の5倍となったこともあり、授業時間のみならず放課後の使用も多かった。



3.6 まとめ

文理探究科のカリキュラム開発にあたって、総合的な探究の時間を含む探究科目7単位の授業計画、実施に向けた取組みを2年間行ってきた。学校設定科目や取り組み方法を模索する中で、他の普通科クラスのSagas（総合的な探究の時間）も見直すこととなり、地域、大学、企業、団体、行政のご協力のもと、徐々に学校が開かれた学びの場となり、生徒自身も「Sagas（探究）が当たり前」の日常となっていると感じる。

先日行った1年生全体へのアンケートで、「Sagasは面倒臭いものだと思っていたが、授業が始まると没頭していた。」というコメントがあった。探究活動は生徒にとって面倒なことだらけだ。「読む」、「考える」、「共有する」、「つくる」、「発表する」、「振り返る」、すべてのプロセスが面倒である。しかし、これら多くの面倒を乗り越えた結果、自分の進路を見つめ直し、新たな挑戦を始める生徒も少なくない。探究活動は決められた一連の作業ではなく、生徒自身が壁に直面し、新たな闘志を燃やしたり、時には途中で立ち止まりスタート地点に戻ったり、はたまた諦めてしまったりと、結果は違うが、一人一人が費やした時間に意義がある。その過程に、伴走する教員がおり、共に考え、寄り添うことがこの教育の目的の一つであると実感する。

新たな取り組みの中、地域が辛抱強く温かい支援を続けてくださっていること、相談する大学や企業、団体がいつも好意的に迅速な協力をしてくださることに心から感謝申し上げたい。

第4章：探究活動における学習効果の分析

本校では令和8年度から始まる文理探究科2年生「総合的な探究の時間（Sagasゼミ）」の先行実施として普通科、サイエンスコースの2年生が「総合的な探究の時間（SagasⅡ）」に取り組んできた。本章では、令和6年度および令和7年度実施の生徒自己評価シートの集計結果に基づき、探究活動における学習効果を分析する。文部科学省が定める「学力の3観点」に沿って、生徒の資質・能力の変容を明らかにするとともに、次年度に向けた指導上の課題を取り上げる。

4.1 評価の視点と手法

1) 「SagasⅡ」について

- 対象生徒：2年生全生徒（キャリア類型、アカデミア類型、サイエンスコース）
- 分析対象：アカデミア類型、サイエンスコース生徒
- 単位数：1単位

2) 評価の3観点

観点	SagasⅡにおける具体的な定義	評価指標の主な項目
知識・技能	探究に必要な情報の収集・取捨選択ができ、ICTツールを用いて効果的な資料作成・発表ができる能力	<ul style="list-style-type: none"> ・正しい情報の取得と取捨選択 ・情報をまとめるICTツール（Word/Excel/PPT等）の活用、図表の提示
思考・判断・表現力	課題の本質を捉えてリサーチクエスチョンを設定し、適切な手法で分析・検証した上で、自らの考えを他者に的確に伝える能力	<ul style="list-style-type: none"> ・課題の全体像把握、RQの設定 ・調査の計画・実施、図表化、仮説立案 ・発表における説明力、質疑応答
主体的に学習に取り組む態度	自身の夢や進路、地域社会との繋がりを意識し、多様な他者と協力しながら、粘り強く探究を調整・継続しようとする姿勢	<ul style="list-style-type: none"> ・探究への学習意欲、地域問題への関心 ・コミュニケーション、チームワーク ・挑戦する姿勢、自己の進路との関連性

本校では、これら3観点をさらに具体化した独自のルーブリックに基づく5件法（1～5）の自己評価を実施している。評価指標は、非認知能力を測る「主体性・学びに向かう力」および、実務的な「知識・技能 / 思考・判断・表現」の2群、下記の6つのカテゴリで構成されている。



4.2 ルーブリック評価の結果と分析

Sagas 探究能力リサーチ

5 件法

(5:とてもあてはまる 4:ややあてはまる 3:どちらともいえない 2:ややあてはまらない 1:全くあてはまらない)

【主体性・学びに向かう力に関する項目】

	n=123	n=105
	R6 年度	R7 年度
開く力 (OPEN)		
1) 探究課題に取り組むためには、もっと勉強しなくてはならない、と感じる。	4.07	4.09
2) 相手に関わらず、基本的なコミュニケーション(挨拶、話し方、聞き方)が大切だと思う。	4.52	4.66
3) 自分に合った役割を見つけることで、チームワークを発揮できると思う。	4.09	4.32
4) 諦めずに挑戦し続けることで、新しいアイデアが生まれると思う。	4.19	4.13
参加する力 (JOIN)		
1) 自分が取り組む課題について、もっと知りたいと思う。	3.84	3.72
2) 知識、経験、失敗の積み重ねが、探究活動の成果につながると思う。	4.24	4.37
3) 自分の探究活動が「自分の夢や将来の進路」(「何か」)につながる可能性があると感じる。	3.99	3.47
4) 自分が住む地域の問題に関心を持ち、改善したいと感じる。	3.57	3.78

【知識・技能 / 思考・判断・表現の項目】

情報収集力 (COLLECT)

1) 課題について、書籍、ネット検索、科学論文講読などを通して、正しい情報を得ることができる。	3.76	3.80
2) 多くの情報やデータから、必要なものを取捨選択して内容を理解することができる。	3.81	3.78

課題設定力 (FIND)

1) 収集した情報やデータから、何が <u>問題</u> で、何がその <u>原因</u> (複数)なのか、疑問点を洗いだし、課題の全体像を把握できる。	3.63	3.49
2) 課題の全体像の中から、何に <u>焦点</u> をあてて探究するか、具体的に設定することができる。(リサーチ・クエスチョン:取り残されている課題)	3.66	3.37

問題分析力 (ANALIZE)

1) リサーチ・クエスチョンについて、それが解決されない(わからない)理由を調査するために、資料収集、フィールドワーク、アンケート評価、予備実験、本実験などを計画、実施できる。	3.65	3.36
2) 1)で調査した内容を図表、グラフを用いて、わかりやすくまとめることができる。	3.64	3.69
3) 追加で情報収集、新たな仮説立案などを行い、現時点での「BEST」を提案できる。	3.49	3.30
4) 探究成果をまとめ、不足点や今後の課題を整理できる。	3.55	3.59

発表力（PRESENT）

1) Word、Excel、PowerPoint などを使い、情報の整理、分析、資料作成することができる。	3.65	3.63
2) 言葉を絞り込み、図表を効果的に提示し、考えが整理された資料を作成できる。	3.61	3.62
3) 資料に説明を加えて、表情、声量、スピードを操りながら、わかりやすく伝えることができる。	3.58	3.56
4) 発表後の質問に、必要に応じて資料を提示しながら、的確に答えることができる。	3.52	3.28

4.3 分析と考察

1) 分析

a. 肯定的な変容が見られる項目

R6 年度から R7 年度にかけて、特に「社会性」や「探究の基盤」に関する自己評価が向上している。

・コミュニケーション能力の向上（OPEN）

「基本的なコミュニケーションが大切だと思う」の項目が 4.52→4.66 と上昇。グループワークや教員とのやり取り、また外部機関との関わりの中で、礼儀や対話の重要性を実感している。

・チームワークと役割意識（OPEN）

「自分に合った役割を見つけ、チームワークを発揮できる」が 4.09→4.32 と上昇。集団の中での自己の立ち位置を客観的に捉えられるようになってきている。

・試行錯誤の肯定（JOIN）

「知識、経験、失敗の積み重ねが成果につながる」が 4.24→4.37 と向上。「とりあえず挑戦してみよう」というマインドセットが定着しつつある。

・地域への帰属意識（JOIN）

「自分が住む地域の問題に関心を持ち、改善したいと感じる」が 3.56→3.78 と上昇。探究活動の問い立ての中で、身近な課題を取り上げる生徒が多く、内容をより具体化できるようになった。

b. 数値向上の要因（仮説）

コミュニケーションやチームワークに関しては、当該学年の雰囲気によるものも大きい。しかし、最大でも生徒 13 名に対して一人の教員が指導できる体制が整ったため、各生徒とのやりとりが増加し、生徒の特徴に応じた伴走が可能であったことも一因であると思われる。また、「地域への帰属意識」に関しては、地域の課題に関して問い立てした生徒数は前年並みであったが、調査方法や内容がより具体的になったことも一因と考えられる。

c. 数値が下降・停滞している項目

探究の核心部である「論理的思考」や「キャリア形成」に関連する項目で、数値の低下が見られる。考えられる要因は以下の通りである。

低下した項目	R6	R7	考えられる要因（仮説）
進路との関連性（OPEN）	3.99	3.47	R6は「自分の夢や将来の進路」の箇所が「何か」のみであった。具体的に問いかけた結果、課題探究の内容と現時点での進路希望との間にギャップを感じた可能性がある。
情報収集力 課題の具体化（FIND）	3.63 3.66	3.49 3.37	情報収集力はある程度維持されているが、AIの使用法を含め情報リソースが多様化し、その選択や処理の方法に戸惑いがある。また、それに関連し、リサーチ・クエスチョンの具体化に課題がある。
調査の計画・実施 （ANALYZE）	3.65	3.36	リサーチ・クエスチョンに具体性が欠けるため、そのフィールドワークや実験が十分に実施できなかった可能性がある。
質疑応答への対応 （PRESENT）	3.52	3.28	昨年よりも発表練習に時間を費やしたが、質問に答えるための「深い背景知識」や「多角的な視点」での検証が不足している。

2) まとめ：なぜ探究の「質の向上」が難航しているのか

数値の低下は、一見すると後退に見えるが、生徒の自己評価の基準が厳格化した（＝探究の難しさを正しく理解した）という側面もある。令和6年度は「なんとなくできていた」という感覚だったものが、令和7年度は教員を含め探究への理解がさらに進んだことから、生徒が能力の不足や課題の難しさを客観的に自覚した結果（メタ認知の向上）とも推察される。

特に、FIND、ANALYZEの項目は、基礎的学力の活用法を探る応用的分野であり、文献検索やその読解力にも大きな課題が残った。インターネットで文献を探すことが日常であるが、必要な文献は印刷し、さらに読み込むという習慣をつける必要がある。文献講読を通して、気になったところや興味を持った内容を確認、共有、そして議論しながら、教員は生徒と共に新たな課題に共に向き合う伴走心がけたい。

FIND、ANALYZEの力は昨今の共通テストや大学入試でも求められる力と重なる。探究活動を論理的に実施するための基礎力であるため、各教科活動での「思考・判断・表現力」の育成をなお一層大切にしたい。

第5章：成果の普及と広報

5.1 発表会などの実施

1) 南あわじ市役所との連携授業

6月25日「Sagas 問答」(2年生 Sagas II 全員対象)

南あわじ市職員と本校教員がペアになり、それまでに調査した内容や問い立てに関して、口頭試問を行った。



2) 校内発表会

a. 7月23日「Sagas 地域発表会」

(2年生中間発表、3年キャリア類型最終発表)

南あわじ市広報にて広く告知し、市長、市役所職員、保護者、地域関係者などが多数来校した。中間発表のタイミングで幅広いご意見をいただくことで、リサーチクエスションの再考を夏休みに促した。



b. 12月17日 「1年生に探究活動を聴いてもらおう！」

(Sagas I、Sagas II 合同授業)

2年生が探究活動終盤にあたり、これまでの成果を1年生にひとりずつ対面発表し、質疑応答した。冬休み前に実施することで、これまでまとめたリサーチの結果を見つめなおし、3学期にまとめ作業に入る前に、課題の見直しや追加調査は必要ないか考えさせた。1年生にとっては、来年度から始める課題研究のイメージを持つ機会となった。



c. 2月18日 「Sagas II 発表会」

(2年アカデミア、サイエンスコース最終発表、キャリア類型中間発表)

1年間の探究成果発表を行い、南あわじ市職員もオーディエンスとして評価に加わった。教員用評価シート、生徒用相互シートを利用し、内容を振り返る機会とした。アカデミア、サイエンスコースはこの後の授業で、ルーブリックによる自己評価を実施した。



3) 島内普通科高校探究活動合同発表会「トリコロ★クエスト」

昨年度より、淡路島の普通科高校（洲本、津名、淡路三原）の探究活動合同発表会を主催校として実施。各校のカラーを活かし、生徒の興味や地域に根ざした探究活動の内容を共有する機会を設けている。トリコロは3色を表すトリコロールから、またクエストは「探究」の意味である。

日 時：令和7年3月5日（木）14:30～17:00

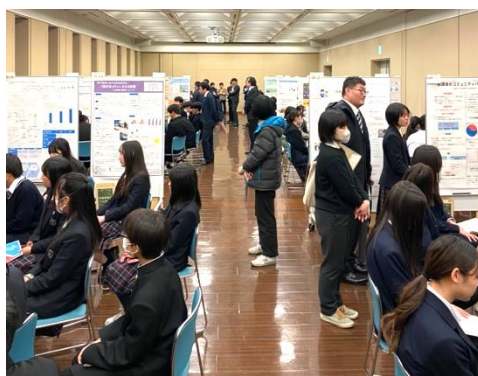
場 所：洲本市文化体育館会議室 A

内 容：主に2年生によるポスター発表と特別講師7名による分科会

発表数：洲本高校 15、津名高校 5、淡路三原高校 11



発表会



分科会全景



分科会

分科会担当講師:発表ポスターを参照しながらの講評と、キャリア形成に関する助言

	所属・役職	講師名
1	神戸市立外国語大学国際関係学科准教授 神戸グローバル教育センター長	中嶋 圭介
2	(株)海空 代表取締役社長	大継 康高
3	兵庫県立大学大学院 緑環境景観マネジメント研究科 准教授	嶽山 洋志
4	関西看護医療大学看護学科 准教授	西村 由実子
5	(株)あべいすと 代表取締役	安部 則行
6	日東コンピューターサービス株式会社 代表取締役	石田 一成
7	吉備国際大学農学部 地域創成農学科 教授	松原 茂仁

4) 発表会で使用する評価シートについて

「SagasⅡ地域発表会」と同様の生徒用評価シートと指導者用評価シートを準備し、発表者に対してフィードバックを行ったが、トリコロ★クエストにおいては、初見かつ短時間で指導者用評価シートを書き込むことが難しいという意見があったため、次年度は生徒用評価シートをベースとして簡略化したい。

生徒用相互評価シート

トリコロ★クエスト 相互評価シート

氏名

発表番号 ()

タイトル

ポスターのデザインについて

<ul style="list-style-type: none"> ・フォントサイズ ・図表の表示方法 ・図表、文字の配置 ・全体的な印象 	優れている ・ 普通 ・ 努力が必要
--	--------------------

内容について

1. 探究の目的を理解できるか	理解できる ・ ほぼ理解 ・ 理解できない
2. 探究方法について理解できるか	理解できる ・ ほぼ理解 ・ 理解できない
3. 考え方や計画について、筋が通っており、理解ができるか	理解できる ・ ほぼ理解 ・ 理解できない
4. 話すときの態度や視線、声の大きさや話す速さ	優れている ・ 普通 ・ 努力が必要

意見・感想

指導者用評価シート

トリコロ★クエスト 評価シート

記載者

発表番号 ()

タイトル

項目	評価	小計
内容 40	リサーチクエスト / プランの独自性 (面白さ)	1 2 3 4 5 6 7 8 9 10
	構成・展開	1 2 3 4 5 6 7 8 9 10
	使用文献、実験、フィールドワークなどの検証方法	1 2 3 4 5 6 7 8 9 10
	考察、結論 / 今後の計画の論理性 (主張の説得力)	1 2 3 4 5 6 7 8 9 10
言葉 30	選択 (自分の言葉でわかりやすく伝えたか)	1 2 3 4 5 6 7 8 9 10
	責任 (使用表現の意味・内容が理解できているか)	1 2 3 4 5 6 7 8 9 10
	分量 (発表時間を有効に使用できたか)	1 2 3 4 5 6 7 8 9 10
表現 30	声質 (大きさ・明瞭さ・速さ・間)	1 2 3 4 5 6 7 8 9 10
	ジェスチャー・目線・姿勢	1 2 3 4 5 6 7 8 9 10
	態度 (自信・熱量)	1 2 3 4 5 6 7 8 9 10
Total		

記載者からのコメント

5.2 先進校の視察

令和8年1月20日（火） 三重県立上野高校にて視察先進校視察を行った。

上野高校は2019年からスーパーサイエンスハイスクール（SSH）、2022年から3年間、本事業に指定されており、2025年より普通科クラスを「学際探究科」に改編した。

■上野高校出席者：脇本竜平教頭、森本亮教諭、犬飼将登教諭、福井謙太教諭

■本校出席者：坂井啓太郎教頭、黒田陽子主幹教諭、岩木拓也教諭、山口聖子実習助手

内容：

1) 普通科改編の概要

- ・文理探究科1期生が入学した2025年より、6つの改革として、「普通科を学際探究科へ名称変更」「制服変更」「前期選抜の拡大」「授業時間短縮」「理数科のクラス増」「海外修学旅行」を実施した。
- ・地域の過疎化が進む中で学校の在り方を見直した。探究的な学びを重視し、「社会で活躍する力」「大学入試を突破する力」「大学で伸びる力」を育成している。
- ・新体制では学際探究科4クラス、理数科2クラスの合計6クラス編成である。
- ・SSHの事業内容でも、「文理にとらわれない学び」「探究的手法の授業導入」などの課題があるが、職員研修などの実施により、教員の意識が向上し、現状課題が明確に認識されるようになった。
- ・探究を学年主導から「ゼミ制」とし、教員が継続的に活動できる体制を目指している。
- ・文理探究型授業「学びのクロス」を1年生で導入し、生徒が教科間のつながりを認識する機会をつくっている。教員にとっても教科間のコミュニケーションが活発化し、新たな授業に挑戦する機会となった。
- ・地域や同窓生とのつながりを強化し、さまざまな支援を得ている。
- ・普通科改編後は、生徒募集において順調に定員を満たしている。

2) 学際探究科授業見学（みらい探究UQ）

1年生に行う探究活動スキル習得のための授業（UQ）を見学した。本授業では、GROW Academyの教材を使用し、「五感を使って相手を動かすコミュニケーションをする。」を目標に、個人ワークとペアワーク、振り返りを通して、プレゼンテーションスキル向上を図っていた。

3) 本校への成果普及方法

- ・SSHと本事業が相乗効果をもたらし、教員の探究活動に対する意識が向上している。本校でも探究活動に関わる教員が増えることで、「学びのクロス」のような教科間連携や探究活動に関するアイデアが出しあえるような取り組みを行いたい。
- ・広報活動では、「6つの改革」の内容に見られるように、改革内容をわかりやすいキーワードでターゲットに伝える工夫を行いたい。
- ・地域の企業や同窓生とのつながりを深め、まずは地域に信頼される学校を目指したい。

5.3 オープンハイスクールの実施

1) 第1回：文理探究科オープンハイスクール（Sagas Day I）

■日程：令和7年6月28日（土）

■目的：新教室「探究ラボ」にある機材を使った体験会を行い、文理探究科の学びの理解を深める。

■対象：中学生とその保護者（参加32名）

■内容：

a. 探究ラボ体験会「VRゴーグル」「3Dプリンタ」「映像Switching」

機材をローテーション形式で体験した。内容の考案と支援はサイエンスコース2年生が行った。

b. 在校生の発表と座談会

サイエンスコース3年生が課題研究のポスター発表を行い、同2年生が実験を伴う実践発表をおこなった。



3Dプリンタ体験



VRゴーグル体験



探究活動の発表と座談会

2) 淡路三原高校オープンハイスクール

■日程：令和7年8月19日（火）、20日（水）

■目的：本校の教育活動の内容と意義を広く中学生とその保護者に知っていただく。

■対象：中学生とその保護者（参加303名）

■内容：

a. 学校説明

- ・2年生代表がカリキュラムと特色ある教育活動について説明を行った。
- ・1年文理探究科、2年キャリア、アカデミア類型の生徒が学びの成果を報告した。

b. 三高コレクション

生徒会、部活動代表生徒による制服とユニフォームのファッションショーを行った。指導はフィットネスで国際的に活躍し、地元で教室を営む本校同窓生が行った。

c. 学びアソート（体験授業）

文理探究科、キャリア類型、アカデミア類型にレベル分けした授業を2つ選択し、各教科の特色ある学びを体験した。

d. 部活動体験・見学

事前申し込みの上、希望の部活動を体験した。その他、自由に見学できるように、生徒主体で案内を行った。

e. 食堂体験

体験授業、部活動体験・見学の後、生徒食堂のメニューを自由に試す機会を設けた。



三高コレクション



体験授業

3) 第2回：文理探究科オープンハイスクール（Sagas Day II）

■日程：令和7年10月18日（土）

■目的：文理探究科の学校設定科目「データサイエンス基礎」「読解 Integral」を体験し、文理探究科の学びの理解を深める。

■対象：中学生とその保護者（参加21名）

■内容：

a. 文理探究科概要説明

スライドを使用し、文理探究科設置の意味と学びの内容を15分で説明した。

b. 体験授業「データサイエンス基礎」「読解 Integral」

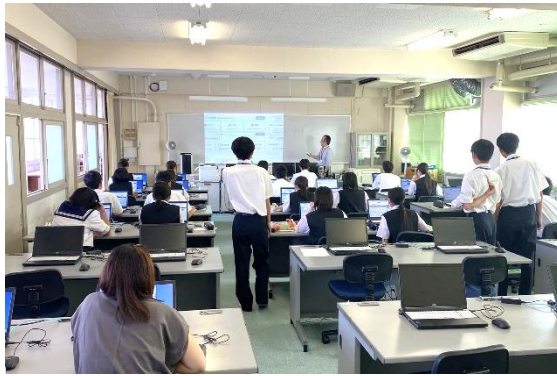
二つの授業を40分ずつ行った。データサイエンス基礎では実際に1年生が行った地域経済分析システム（RESAS）を使用し、統計データの活用方法について授業を行った。また、読解 Integral は「美の価値観」の多様性について、日本語と英語で異なる題材を与え、自分の価値観を探る内容であった。

c. 探究活動の発表

2年サイエンスコースの生徒が、日経STEAMで舞台発表を行った内容についてプレゼンテーションを行った。

d. 在校生との座談会

文理探究科1年生とグループで座談会を行った。



データサイエンス基礎授業体験



探究活動の発表

4) オープンハイスクール課題点

少子化の影響もあり、10年前と比較して、今年度8月のオープンハイスクール参加数は82%に減少幅した(371→303)。募集方法が中学校ごとから個人申込となり、中学校教員の関与が少なくなったことで、その参加に関しても生徒の自主性が重んじられていることが要因の一つである。全島的に生徒募集の定員割れもあり、受験を契機とする中学生の学びや進学への意欲向上は難しくなっている。加えて、コロナ禍での説明会縮小、廃止などを経て、中学生が高校の特色を知る機会は、高校側がその機会を創り出さない限り増えることはない状況である。

オープンハイスクールは、高校生も参加して、普段の学校生活の雰囲気を知ってもらう唯一の機会である。中学生が自ら学校を選び、「行ってみよう」と思う仕掛けづくりが必要である。このためにも「地域の学校」として、日常から探究活動や部活動、ボランティア活動を通して、生徒同士が交流し、中学生が高校を気軽に訪れられるような取り組みを考えたい。

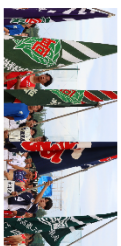
また、今年度は2度の文理探究科オープンハイスクール Sagas Day を行ったが、参加数は文理探究科の定員を満たしておらず、設置の目的が伝わっていない。今後は、オープンハイスクールが形式的な実施とならないよう、中学校と授業連携するなどして、まずは学びの共有を行い、「学ぶことは楽しい」と思えるような工夫がますます必要となるだろう。

5.4 その他広報活動の方法

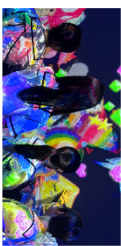
- 1) 中学校訪問：全島15中学校—6月学校案内配布
近隣中学校6校—6月、10月、11月訪問説明
- 2) 文理探究科説明会：南あわじ市南淡中学校 令和8年3月18日(水)
- 3) インターネット媒体：学校公式ホームページ、インスタグラム、メディアプラットフォーム note
- 4) チラシ配布：前期、後期に分けて、南あわじ市立小学校、中学校教員、教育委員会に成果チラシを配布。部活動の戦績や文理探究科の活動や進路実績を掲載。(次頁参照)

淡路三原高校だより

生徒が地域を知り、地域に学び、地域で輝く学校へ



部活動
探究活動
UPDATE
PAGE 1



文理探究科
Sogas Day II
Q&A
PAGE 2

部活動・探究活動 2025上半期の活躍

(※イ：サイエンスコース、文探：文理探究)

全国大会出場！

水泳部 3年 津田琉生(三原)、2年 吉田望乃(三原)、廣本悠真(三原) 棒高跳 / 3年 田村雅生(清洲) やり投げ

国アホ背泳ぎ200m、スタートリプル4×100m

放送部

2年 村上通香(三原・サイ)、インターハイ自由形50m、国ア自由形リレー4×100m
3年 柳井せりな(三原)、2年 道上通(三原・サイ)、原頭侑大(洲原)

NHK杯全国放送コンテストテレビレキコム部門

書道部

3年 柏木莉菜(清洲)、1年 廣内梨央(三原) 全国高校生書道展特選

探究活動

日経STEAM ボスター発表の部 審査員特別賞
2年 アカデミア代表チーム 3宅かよ(清洲)、向美光(三原)、加藤大雄(清洲)、宮迫昇矢(三原)

近畿大会出場

陸上競技部 3年 島田侑奈(三原)、2年 吉田望乃(三原)、廣本悠真(三原) 棒高跳 / 3年 田村雅生(清洲) やり投げ

淡路大会ほか

陸上競技部 男女とも駅伝県大会出場決定！ 剣道部 団体優勝、1年 岸本蓮一朗(三原) 個人優勝
ソフトテニス部 2年 久保玄斗(三原) シングルス準優勝 女子バスケ部 トポトル部 総体優勝
サッカー部 東播 1部リーグ 現在1位 県リーグ昇格目指す！

NEWS



英検準1級取得
3年 本田悠衣(三原・サイ)、山根怜(清洲・サイ)
曾田蒼葉(三原・サイ)、山根怜(清洲・サイ)
数学・理科甲子園出場
1年 仲野慧斗(三原・文探)、藤本仁志(三原・文探)
2年 藤井栞正(三原・サイ)、角所健(三原・サイ)、堀川陣貴(清洲・サイ)、土井悠誠(三原・サイ)
伊藤園お〜いお茶新伴句大賞
2年 山本侑真(清洲) 佳作
留学奨学生・費用全額補助
2年 奥野陽菜乃(三原) アメリカ大使館主催
留学先：サンフランシスコ (3週間)
花田善(三原) 兵庫県教育委員会主催
留学先：サンフランシスコ (3週間)

地域・探究活動

総合的な探究の時間「Sogas II」
キャリア類型—南あわじ市役所5部課との連携活動
ふるさと創生課・危機管理課・万博・観光情報室
・市立図書館・障害活動推進室
アカデミア・サイエンスコース—コンテスト参加中
日本政策金融公庫ヒラネコランツリ
・リクルート高校生Ring・マイナビ甲子園
ポロンティア活動
・植染染祭子ども向けブース出展
・さばつとらんかんが！何万子でも向いブース出展
・南あわじ市内各ビーチでの清掃活動
・南あわじ市アワード—スクールポロンティア
・柳士、和太鼓、吹奏楽、ダンス部施設での公演

文理探究科

Sogas Day II

Q&A

10月に文理探究科オープンハウススクールSogas Day IIを実施しました。これまでに保護者の皆様からいただいた質問への回答を共有させていただきます。進路指導にご活用ください。

「文理探究科と普通科との違いは何ですか？」

実は文理探究科は「普通科」の一つです。これまでの普通科カリキュラムを深化させ、より応用力がつけられるのが、本校文理探究科のカリキュラムです。

「文理探究科と洲本高校の総合探究類型の違いは？」

クラス	淡路三原高校文理探究科	洲本高校総合探究類型
クラス	1クラス3年間同じ	探究授業のみ類型で実施
人数	40名	24名
授業時間数(単位数)	3年間で93単位	3年間で96単位

・「探究」と共通の名称はついていますが、それぞれ違った特色があります。
・多くの南あわじ市の生徒にとって、自力通学が可能で、時間を有効に使えます。

「卒業後の進路目標はどのように設定していますか？」

・前身のサイエンスコース進路実績は、淡路三原高校の国公立・難関私立大学の合格数を支えています。この目標は文理探究科も同様です。そのため、文理探究科では、他のクラスよりも数学・物理・英語で教科書レベルが高いものを1年次から使用しています。

「現在の大学入試について、親世代との違いを教えてください。」

・現在、私立大学入試の60%は総合型・推薦型です。また、国公立も今や2.5%が総合型・推薦型で、筆記試験だけで測る一般入試の割合は減り続けています。私立、国公立の難関大学の総合型・推薦型に対応するには、筆記試験の学力に加えて、思考力・創造力・コミュニケーション能力などの応用力を鍛える必要があります。文理探究科ではレベルの高い教科学習と、教科融合科目「データサイエンス基礎」「読解Integral」、探究活動を組み合わせ、一般入試および総合型・推薦型に対応します。

「どんな生徒に合っていますか？」

・「学力」と「挑戦力」をつけたい生徒です。そのため基礎学力が身についていること、そして積極的にコミュニケーションを取れる向上心を持った生徒を求めています。

「Sagasツアーは全員参加ですか？」

・自由選択制で、参加しないという選択肢もあります。3つのコースは日程も別のため、1、2年ですべてに参加することも可能です。宿泊は一人一部屋で、ゆっくりと一日を振り返り、翌日に備えます。自立心と興味の幅を広げることが目標です。

その他、文理探究科の特徴

- 2年からクラス内で志望大学・学部に応じ、「理系」「文系」型に分かれます。特に理系は、学費が安く、研究が盛んな国公立大学合格を目指します。実験など少人数で、きめ細かく学ぶことが出来るため、理系分野に関心のある生徒こそ文理探究科へ。
- 「データサイエンス基礎」を通して、数学の興味を増幅させ、論理的思考力を高めます。また、「読解Integral」で社会を読み解く力と発信力を養い、現代に必要な教養を深めます。
- 様々な分野で活躍する社会人だけでなく、頑張る他校生と関わりを深め、共感力や自分の意見を伝える力を身につけて、世界を大きく開きます。

小中学校教員限定

淡路三原高校だより

生徒が地域を知り、地域に学び、地域で輝く学校へ



部活動
探究活動
UPDATE
PAGE 1



探究が
つなぐ進路
'25進路実績
PAGE 2

部活動 2025下半期の活躍 (ササゲ：サイエンスコース、文探：文理探検)

近畿大会出場

陸上競技部 近畿高等学校コーエス陸上競技対校選手権大会
2年 藤本 悠真 (三原) 2年 吉田 望乃 (三原) 棒高跳

県大会等

水泳部 2年 村上 遥香 (三原・ササ) 県ジュニア選手権 50m自由形 第1位
3年 津田 琉生 (三原) 県冬季水泳競技大会 50m/100m自由形 第1位
2年 久保 玄斗 (三原) 県冬季水泳競技大会 100m背泳ぎ 第2位

ソフトテニス部 2年 久保 玄斗 (三原) 県ソフトテニス大会 ベスト8

男子バレーボール部 県新人大会 ベスト16

バスケットボール部 県選手権 男子 ベスト16 女子 ベスト32

サッカー部 Uー18県リーグプレーオフ出場

書道部 2年 石濱 結羽 (三原) 県総合文化祭 特選

自然科学部 2年 堀川 晴貴 (三原・ササ) 2年 山崎 泰佑 (三原) 1年 仲野 碧斗 (三原) 1年 柳翔 太郎 (三原) 文探
県総合文化祭 物理部門 優秀賞 「密試きロボット製作」プロジェクト

吹奏楽部 2年 原頭 侑大 (三原) 2年 前池 百花 (三原) 1年 山崎 夢垂 (三原)
フンソングコンテスト 打楽器3重奏 金賞→県大会出場



水と和を半ば成る春の物
を筆に描き出す
淡路三原高等学校

地域貢献活動

郷土部 広田地区敬老会 「披露」
ケアホーム 公商あわじ

ダンス部 県立あわじ特別支援学校ダンス交流会
吉備国際大学 学園祭

JAあわじ 島農協まつり



吹奏楽部 ハートフルあいコンサート
第10回平成淡路看護専門学校 学校祭

ボランティア部 第7回 三海輝クレーンアツツ企画・運営
同好会 うずしおハイスクール 開催※

※ 県民100名を対象に、「海の時勢を次の世代につなぐ」ことを目指した
浜瀬クルーズを体験し、「海の時勢を次の世代につなぐ」ことを目指した

探究が つなぐ進路

「合格のため」ではなく、「その先を目指して」学ぶ高校時代に！

01.

淡路三原高校では
探究活動を通して
自分のキャリアを徹底的に追求して
いきます。

令和7年度 全国探究コンテスト実績

- ・日本経済新聞社
日経STEAM 3チーム参加
- ・舞台発表
- ・「私たちは問う自由で豊かな未来のために」
デジタルアート展発表会
- ・探究ポスター発表

高校生Ring 2チーム参加

マイナビEJ
マイナビキャリア甲子園

Innovation部門 4チーム参加



探究ポスター発表
審査員特別賞受賞
2年アカデミア類型
向井光 (三原)
宮迫勇希 (三原)
加藤大雅 (三原)



チーム100選出 (2チーム)
2年アカデミア類型
奥野陽菜 (三原)
遠水日和 (三原)
富永彩夏 (三原)



準決勝進出 (東京開催)
2年アカデミア類型
奥野陽菜 (三原) 遠水日和、富永彩夏

02. 国立推薦入試合格 令和7年度合格実績

国立大学の推薦入試や総合型選
抜入試では、高校での探究活動の
内容と大学で学ぶ目的を連携さ
せ、具体的な目標と意欲のある学
生を選抜しています。

兵庫県立大学 環境人間学部

徳島大学 医学部 医学科

大阪公立大学 商学部

徳島大学 理工学部

すべてサイエンスコース
合格者全員が日経STEAMなど校外で
の探究発表に出場し、目的意識を高め
ました。

03. 国立大学前期選抜合格

サイエンスコース	アカデミア類型
京都大学 (薬)	岡山大学 (教育)
東北大学 (工)	徳島大学 (生物資源)
千葉大学 (園芸)	香川大学 (経済)
広島大学 (文・教育)	鳴門教育大学 (学校教育)
名古屋工業大学 (工)	北見工業大学 (工)
徳島大学 (薬/理工/総合科学)	高知県立大学 (文化)
和歌山大学 (経済) など	

関国回立などの難関私立にも
後期選抜の発表は3/20以降です
2月入試で前期に合格

04. サイエンスから文理探究科へ

今年度サイエンスコース卒業生は文理探究科のカリキュラムの先
行実施として、探究活動やSage'sツアーなど、これまでにはな
かった取り組みを多く経験してきました。文理探究科では、三原高
校科学コースからサイエンスコースまでの実績を継承しながら、
複雑な現代社会で無欲的に活動できる人を育てます。

令和7年度入学生教育課程

下線科目は学校設定科目

u003cbr>

学年・類型	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	
1年	文理探究科 普通	現代の国語	言語文化	歴史総合	公共	数学Ⅰ	数学Ⅰ	数学Ⅰ	数学Ⅰ	数学Ⅰ	数学Ⅰ	数学Ⅰ	数学Ⅰ	数学Ⅰ	数学Ⅰ	数学Ⅰ	数学Ⅰ	数学Ⅰ	数学Ⅰ	数学Ⅰ	数学Ⅰ	数学Ⅰ	数学Ⅰ	数学Ⅰ	数学Ⅰ	数学Ⅰ	数学Ⅰ	数学Ⅰ	数学Ⅰ	数学Ⅰ	数学Ⅰ	数学Ⅰ	数学Ⅰ
		現代の国語	言語文化	歴史総合	公共	数学Ⅰ	数学Ⅰ	数学Ⅰ	数学Ⅰ	数学Ⅰ	数学Ⅰ	数学Ⅰ	数学Ⅰ	数学Ⅰ	数学Ⅰ	数学Ⅰ	数学Ⅰ	数学Ⅰ	数学Ⅰ	数学Ⅰ	数学Ⅰ	数学Ⅰ	数学Ⅰ	数学Ⅰ	数学Ⅰ	数学Ⅰ	数学Ⅰ	数学Ⅰ	数学Ⅰ	数学Ⅰ	数学Ⅰ	数学Ⅰ	数学Ⅰ
2年	文理探究科 アカデミア類型	現代の国語	言語文化	歴史総合	公共	数学Ⅰ	数学Ⅰ	数学Ⅰ	数学Ⅰ	数学Ⅰ	数学Ⅰ	数学Ⅰ	数学Ⅰ	数学Ⅰ	数学Ⅰ	数学Ⅰ	数学Ⅰ	数学Ⅰ	数学Ⅰ	数学Ⅰ	数学Ⅰ	数学Ⅰ	数学Ⅰ	数学Ⅰ	数学Ⅰ	数学Ⅰ	数学Ⅰ	数学Ⅰ	数学Ⅰ	数学Ⅰ	数学Ⅰ	数学Ⅰ	数学Ⅰ
		現代の国語	言語文化	歴史総合	公共	数学Ⅰ	数学Ⅰ	数学Ⅰ	数学Ⅰ	数学Ⅰ	数学Ⅰ	数学Ⅰ	数学Ⅰ	数学Ⅰ	数学Ⅰ	数学Ⅰ	数学Ⅰ	数学Ⅰ	数学Ⅰ	数学Ⅰ	数学Ⅰ	数学Ⅰ	数学Ⅰ	数学Ⅰ	数学Ⅰ	数学Ⅰ	数学Ⅰ	数学Ⅰ	数学Ⅰ	数学Ⅰ	数学Ⅰ	数学Ⅰ	数学Ⅰ
3年	文理探究科 アカデミア類型	現代の国語	言語文化	歴史総合	公共	数学Ⅰ	数学Ⅰ	数学Ⅰ	数学Ⅰ	数学Ⅰ	数学Ⅰ	数学Ⅰ	数学Ⅰ	数学Ⅰ	数学Ⅰ	数学Ⅰ	数学Ⅰ	数学Ⅰ	数学Ⅰ	数学Ⅰ	数学Ⅰ	数学Ⅰ	数学Ⅰ	数学Ⅰ	数学Ⅰ	数学Ⅰ	数学Ⅰ	数学Ⅰ	数学Ⅰ	数学Ⅰ	数学Ⅰ	数学Ⅰ	数学Ⅰ
		現代の国語	言語文化	歴史総合	公共	数学Ⅰ	数学Ⅰ	数学Ⅰ	数学Ⅰ	数学Ⅰ	数学Ⅰ	数学Ⅰ	数学Ⅰ	数学Ⅰ	数学Ⅰ	数学Ⅰ	数学Ⅰ	数学Ⅰ	数学Ⅰ	数学Ⅰ	数学Ⅰ	数学Ⅰ	数学Ⅰ	数学Ⅰ	数学Ⅰ	数学Ⅰ	数学Ⅰ	数学Ⅰ	数学Ⅰ	数学Ⅰ	数学Ⅰ	数学Ⅰ	数学Ⅰ

関係資料

1. 令和7年度入学生教育課程表

2. 文理探究科 1 年アンケート結果

令和 7 年度文理探究科 1 年生 活動アンケート

n=24

項目	評価(4件法)
1. データサイエンス基礎(DS 基礎)で、数学の知識がデータ分析に役立つと感じた。	2.7
2. データサイエンス基礎(DS 基礎)では、鳴門教育大学藤原先生の授業で、新しい視点や興味関心を得られた。	3.0
3. Sagas ラボでは、ノートの取り方や文献検索の方法、基礎的な探究技法やデータ解析技法を学ぶことができた。	3.3
4. Sagas ラボでは、大学施設での高度な実験設備を用いた授業で、理科的興味が湧いたり、進路を考えるきっかけとなった。	2.9
5. English in Use では、基礎的な知識の定着が、表現力を含む英語力向上につながると感じた。	3.0
6. 文理探究科 note では「半径5メートルの不思議」を発信することで、身近な疑問を考えるきっかけとなった。	3.2
7. Sagas ツアーでは、企業や大学を訪問し、自分の将来について考える機会となった。(不参加の場合、回答の必要なし)	3.6
8. Sagas ツアーの「一人部屋」や「行先も参加も自由」というコンセプトは良いと思う。	3.8
9. 冬の研修旅行(西はりま天文台・半導体製造工場)は楽しみですか。	3.8
10. B 棟 1 階の探究ラボは文理探究科のためにつくられました。グループワークや ICT 活用において、通常の教室より学びやすいと思いますか。	3.1
11. 文系、理系の生徒が混ざり、多様な興味関心や意見があるこのクラスは、自分にとって居心地がよい場所ですか。	3.4
12. 「自分たちが文理探究科をつくっている」というワクワク感や責任感を感じる場面はありましたか。	2.9

自由記述回答まとめ

13. この 1 年で一番印象に残っている活動は何ですか。 ・Sagas ツアーに関する記述が 7 割。その他、文化祭や数学理科甲子園での協働作業、Sagas ラボの実験についてなど。
14. 中学生の時よりも成長したと思うことは何ですか。 ・勉強に対する姿勢(自主性や探究心)やコミュニケーション能力の向上を実感しているという回答が多数。
15. 文理探究科はどんな人が向いていると思いますか。 ・キーワードとして、「創造力」「探究心」「成長」「変化」に集約される。
16. あなたが高校生の間につけたい力はどんな力ですか。 ・「コミュニケーション能力」「自主性」「思考力」「継続力」「挑戦力」「集中力」に集約される。

評価：

- 選択回答では、文理探究科のカリキュラムに関するものより課外活動やクラスの雰囲気についての項目で評価が高い。このことから少人数ながらクラスは団結した雰囲気があるが、授業に関しては、興味関心との関連性に欠けるところがあり、さらなる改善が必要である。
- 1期生として、「文理探究科をつくっている」という意識は薄い。素直な生徒多いが、主体性よりもカリキュラムや行事に追従するのが精一杯という側面がある。今後は、文理探究科を紹介するようなビデオ作成を提案したり、文理探究科 note を他校の学科とフォローし合うなどして、その意識を高める工夫を行いたい。
- 課外活動では「Sagas ツアー」の評価が非常に高い。大学や企業で視野を広げられることが大きいのが、一人部屋とし、気遣いなく参加しやすい設定にしていることや、自由研修の時間を使って、友人と自立、協力して電車を乗り継ぐなどの他愛もないことが刺激となるようである。本事業終了後も同窓会などに支援をいただきながら、ぜひ、自由に選べるツアーを継続させたい。
- 学びへの態度を測る自由記述では、まだ「受験」などの言葉はなく、一様に高校生活を充実させるために必要な「探究心」「向上心」を肯定し、積極的に学びに向かう表現が多い。クラス担任が文理探究科のカリキュラムの目的をよく理解し、普段声掛けを行っていることが大きいと考える。

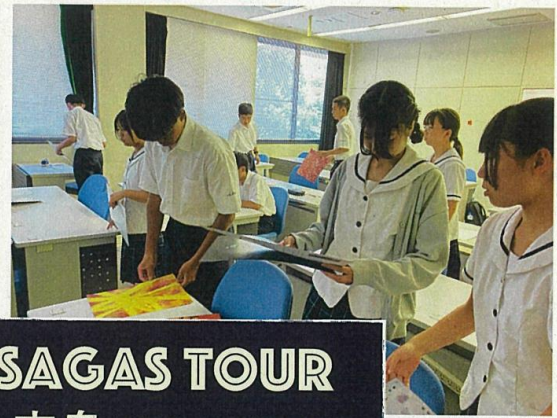
3. Sagas ツアー成果ポスター



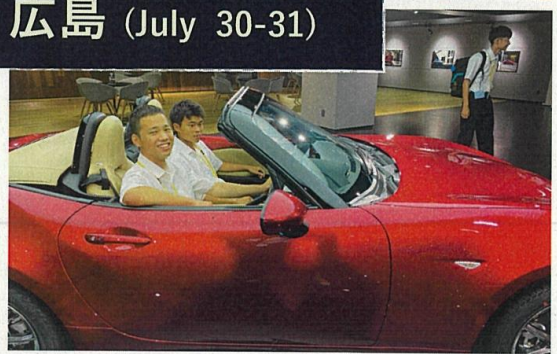
「自国の当たり前は他の国から見れば珍しいことかもしれない。」
 「自分はプレゼンがうまいと思っていた、、、大学生はすごい！」
 「自分からアクションを起こさないと何も始まらないことを痛感。」
 「阪大生とのビブリオバトルに参加した三高生かっこよかった。」
 「体全体で自分の知らない世界を味わった！」



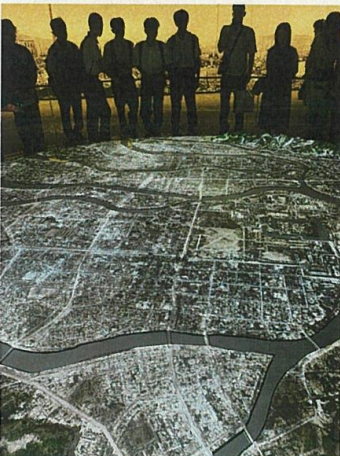
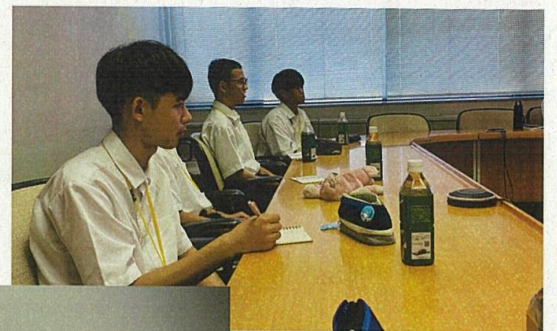
大阪万博2025 夜の万博を楽しむ！
 大阪大学大学院 人文科学研究科 中村 征樹教授
 授業参加 文学部「科学論講義」グループディスカッション
 1年教養科目「ビブリオバトル入門」バトル参加
 大学院生と大阪大学博物館見学
 大阪市内自由研修



SAGAS TOUR
広島 (July 30-31)

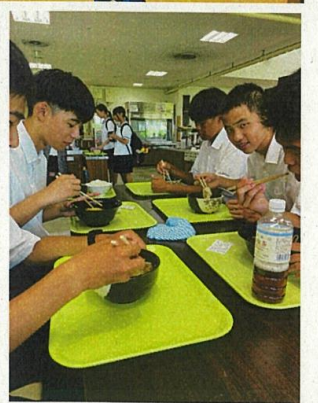


「被爆した人を個として捉えて考える大切さがわかった。」
 「ご飯があること、お風呂に入れること、友達と話せること、毎日の生活に感謝したい。」
 「自分が考えたこともないことに興味を持って、可能性は無限大だと感じた。」
 「1台の車にいろんな思いが詰まっている。感動。」



常識は、覆すためにある。
 Conventions exist to be challenged.

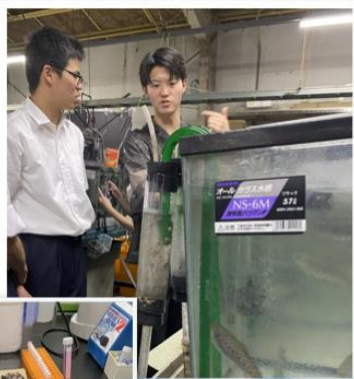
広島大学 大学院人間社会科学部研究科 松永 京子准教授
 「ヒバクしたものたちの〈声〉に耳をすませば」
 広島平和記念資料館 見学
 マツダ株式会社本社 技術本部車体技術部、総務部
 開発エンジニア、調達部門担当者との座談会
 マツダ・ミュージアム エンジニアのガイド・ツアー
 広島自由研修





「自分の芯になる部分は何なのか、確認できる機会だった。」
 「宇宙の広さを考え、現実から離れて気持ちよかった！」
 「法律と校則、問いと疑問がどんどん繋がるおもしろさ！」
 「日本の中心での3日間、地元を出ることではか得られない体験がある。」

SAGAS TOUR 東京 (Aug. 25-27)



富士通株式会社
 本社社員の皆様「未来の語り場」
筑波大学 社会学群
 星野 豊教授「法律から見た学校問題」
JAXA 宇宙センター
 スペースドーム ガイド付き見学
東京海洋大学学術研究院 海洋生物資源学門
 佐野元彦教授、加藤豪司准教授
 大学院2年(本校11回生) 沼田純作
 研究室、博物館訪問、大学院生との座談会
都内自由研修

【兵庫県立淡路三原高等学校】学際領域学科「文理探究科」(令和7年度設置)

文理探究科設置の目的

- ・学際的思考力育成 → 各学問分野への興味関心の深化
→ 社会の変動に対応できる探究心のある人材育成
- ・地域、企業、研究機関の人材と交流 →

①主体性 ②創造性 ③協調性 ④社会参画意識を有した人材育成

特色・魅力ある教育の概要

- ・探究活動+教科横断プログラム
- ・校外研修ツアーの充実
- ・実践的英語運用能力の育成
- ・ICT環境の整備とデータ活用技術の習得
- ・大学・企業と連携した実践的取り組み



多彩なINPUTを
地域を支えるOUTPUTに

関係機関との連携・協働体制の構築方法

南あわじ市連携協定
(地域人材)

地域の課題を知る
地域の強みを知る
地域で働く人から学ぶ

運営指導委員会
(専門家からの助言)

うずしおコンソーシアム
(地域+国際人材)

国内外の課題を知る
未知の世界と違和感から学ぶ
専門的知識、経験から視野を開く

コーダイネーター
(教育と社会の懸け橋)

成果

課題

令和7年度の目標	取組状況
a) 探究「データサイエンス基礎」の実施と「読解Integral」の計画	a) 大学教員による授業年3回以上。他教科知識との融合
b) 総合的な探究の時間「Sagas ラボ」実施と「Sagasゼミ」の計画	b) a)科目との連携で、生きたデータを分析
c) 生徒向け経年アンケートの実施	c) 観点別評価に使用できる5件法22項目のアンケート
d) 企業、研究機関との関係強化と新規開拓	d) 新規企業連携数-2 2年間の連携総数-26
e) 探究活動への生成AI導入	e) 研究機関での教員研修3名 個別最適化を図る活用実践中
f) 探究に係る教員研修の充実	f) 校外発表会、他校視察、研修会への参加-7名
g) 広報活動の充実	g) オープンハイスクール3回 noteでの発信開始

1. 文理探究科1期生の意識調査 探究心や自主性に関する記述多数	1. 定員割れによる影響 - 基礎的学力、多様性に課題
2. アントレプレナーシップ教育の実践開始-中小機構との連携プログラム	2. ビジネス的アプローチと課題 研究的アプローチの研究
3. 全国コンテストへの出場、入賞増加 (2年生：30名)	3. 特定の生徒への偏り - 探究的思考の得意不得意
4. 体験型オープンハイスクール (Sagas Day)の実施回数2回	4. 中学校への内容周知の難しさ - 探究活動への理解不足
5. 夏の研修旅行実施 ： 東京/筑波、大阪、広島 冬の研修旅行実施 ： 西はりま天文台、東芝半導体工場 - 文理融合的思考の育成	5. より主体的な研修態度の育成 - 事前研修の内容充実へ - 地理的デメリットによる受益者負担の増加
6. 生徒の課題研究活動への意識向上 - 主体性を問う項目で数値がUP	6. 情報収集力、情報分析力に 大きな課題

4. 成果概要図

令和6年度指定（学際領域学科）「文理探究科」（令和7年度設置）
新時代に対応した高等学校改革推進事業（普通科改革支援事業）
令和7年度研究開発実施報告書 第2年次

発行日 令和8年3月

発行者 兵庫県立淡路三原高等学校

〒656-0041 兵庫県南あわじ市市円行寺 345-1

TEL. 0799-42-0048

